

---

# 殺し屋殺しの藁人形

式織 檻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殺し屋殺しの藁人形

### 【Nコード】

N2811D

### 【作者名】

式織 檻

### 【あらすじ】

『幽霊研究会』の合宿で、合宿所へとやってきたメンバー達。そこで起こる事件とは……。

## 序章

例えば、誰かに「人は死んだらどこへ行くとと思う？」と聞かれた時、小林雑音は「意味のないことを聞くな」と答えるようにしている。

『天国』や『地獄』、『神様の元へ行く』や『仏様になる』、あるいは『六道』や『生まれ変わり』、『そもそもどこへも行かない』など、この質問に対する答え方は色々あるだろう。その中のどれが正解というわけでもなく、また、どれが間違っているとも言えない問題である。

確かめる術などないのだから、答えは存在しない。  
ならば、答える意味はない。

しかし雑音がこのようなぶっきらぼうな返答をする理由は、こんな当たり前のことに因るものではなくて、もっと前の段階にある。彼が「意味がない」と言っているのは、この質問のさらに基本的なところだ。

そもそも、そんな質問を尋ねる意味がない。  
それを疑問に思う意味がない。

もし科学が、人類が初めてこの疑問にぶつかった時代よりもずっと前から十分発達されていたなら、一体どうなっていただろうか？人間の意識が頭の中の電気信号でしかないことを初めから知っていたら？死んでもただその機能が停止するだけだと知っていたら？現代で何よりも確かで信用のあるものとされている科学がそう言うなら、恐らく皆「人は死んだら何も残らない」という結論を最も信じていただろう。『天国』や『地獄』なんていう概念を思いつく前に、そういう答えを知っていたはずだ。そういう答えに納得していたはずだ。

ただ、その順番が逆だったせいで、  
科学が出遅れたせいで、

人はそんな疑問を持つようになってしまった。迷う必要などなかったはずなのに。悩む理由などなかったはずなのに。

「確かに科学はそう言ってるけど、でも死んだらこの『私』が本当に何もなくなっちゃうっていうのは、少し信じがたいよね。天国とがあってもいいんじゃない？ むしろ私はあつた方が嬉しいよ。そこで死んだおばあちゃんに会えるかも知れないし。きっと科学では証明できないところに、そういう天国とか地獄があるんだよ」

例えば同じ質問に対して、雑音のクラスメイトである東香々美はあずまかがみこのように答える。理屈ではなく願望という次元で、『天国』『地獄』という概念を肯定してしまっている。選んでしまっている。信じてしまっている。ちなみに、この時雑音が

「……君、天国に行けるつもりなのか？」

と口走ってしまい、一秒後に半泣きで自分の頭のたんこぶをなでる羽目になったのは、また別の話であるが。

しかしやはり、このような疑問は『天国』や『地獄』などという概念があるからこそのもので、と雑音は考える。

数学がなければ、文字式がなければ、階乗がなければ、人は『フェルマーの大定理』なんていう謎に直面することもなかったはずである。推理小説がなければ、さらには小説なんていうもの自体が存在しなければ、人はやたら複雑なフィクションの殺人事件に頭を悩ませることはなかったのである。『天国』や『地獄』なんていう概念がなければ、人は死後の世界について悩むこともなかったのである。

結局、この類の謎というのは、元々存在するものではなくて人が生み出すものなのだ。あるべくしてあるのではなく、作られたから存在するのだ。

だから、このような疑問を目の前にするたびに、雑音は不承不承と呟く。

「謎なんてものに、存在意義はないんだよ」

## 第一章「出発前」 その一

明け方六時。

机の上のスタンドだけが周囲を照らす部屋の中、東香々美は椅子に座ったまま腰に手をやり、背中を逸らした。

「……んっ、んっ」

うめくような声と共に、椅子の背もたれがギシギシ言う音と腰骨がぼきぼき言う音が聞こえる。重いものを持ち上げるような顔をしながら香々美はしばらくその姿勢を保っていたが、ふっと息を吐きながら表情を崩し、机の上のパソコンのディスプレイに顔を戻した。そしてもう一度、そこで瞬いているたった今自分が書いたばかりの文章を読み返してみる。

「このホームページは、殺し屋殺しの『藁人形』についての情報交換を目的としたサイトです。『藁人形』とは、十数年前に巷を騒がせた殺人犯のコードネームであり、消息が途絶えるまでの数年間、殺しを生業とする人間、いわゆる殺し屋を標的として殺人を犯していました。この人物について何らかの情報をお持ちの方は、管理人ミラーまでご連絡ください。メールアドレスは――」

香々美はためすがめすこの文章を反復する。誤字脱字がないかの確認だ。初めて作る自分のホームページだけに、最初くらいはすべてを完璧にした状態で発信したかった。

しばらく香々美は画面と睨めっこをしていたが、七回目を読み終わったところで、

「うん、まあ、こんなところかな」

そう呟きながら、マウスを握る。そしてカーソルを『編集完了』のボタンまで持っていき、クリック。砂時計に変わったカーソルを数秒見つめていると、『編集が完了しました』というメッセージが現れた。

確認のために自分のページを開いてみると、さっき書いた通りの

文章が、黒い画面の上に白い文字で浮かび上がる。色合いや文字の大きさなど、期待通りのものになっていた。

「ふーん。こういうソフト エディターって言うんだっけ？」

を使うと、案外簡単にホームページが作れるもんなのね。八代先輩の言った通りだわ」

納得顔で香々美は頷く。別に八代のことを疑っていたわけではなかったが、予想以上の出来栄に感嘆したのだった。

「さつて、と」

言いながら香々美が椅子から立ち上がり、今何時かと壁時計に目をやった、その時、

トントン

「主、朝あさじご飯ができましたよ」

ノックと共に、ドアの向こうから澄んだ声が聞こえてきた。

「あつ、はいはい、今行く」

香々美はそう答え、慌ててパソコンのウィンドウを閉じる。そしてシャットダウンを開始したところで、

「おや、主、パソコンをなさってたんですか？」

ドアを開き、少女が入ってきた。

雪のように青白い髪を肩の下までのばし、白装束に身を包んだ、高校生くらいの体躯の少女。髪と同じ色をした瞳で、きょとんと香々美の動作を見つめている。

「こんな時間に何をなさってたんです？ 調べ物ですか？」

「うっん、自分のホームページ作ってたの」

「……ホームページ？」

「そ。電脳世界の私の城みたいなものよ」

「はあ……」

白装束の少女は曖昧気味に頷く。ホームページなるものの自体は知っていたが、「私の城」という表現が理解の外側だった。

「まあとにかく、トーストが冷めてしまいますので、お早めに朝食をお召し上がりください」

「分かったよ、ナガツキちゃん。でもさあ」

シャットダウンが完了し、マウスから手を離れた香々美は、腕を組みながらナガツキを観察するかのように眺めた。

「はい？ 何です、主？」

「いや、別に不満はないんだけどさ。でも、いつも敬語で、『主』なんて呼ばれて、しかも朝ご飯まで作ってくれちゃってさ。ナガツキちゃん、本当に私の召使いみたいになっちゃってるよ」

「まあ、式神は呼び出してくださった主に使役されるのが務めですから」

「私がナガツキちゃんを呼んだ目的は、あの子猫助けてくれた時点でもう終わってるわけだからさ、あとは別に主も使役もなくて、ナガツキちゃんの思い通りにしてくれていいのに。わざわざ毎朝私の朝ごはん作ってくれなくても まあ、私はありがたいんだけど 絶対しなきゃいけないってことでもないでしょ？」

「うふふ、お心遣い痛み入ります、主。しかしわたくしの思い通りにというのなら、どうぞこのままでいさせてください。この方が、収まりがいいというか、わたくしも居心地がいいのです」

「ふーん、そっか。ならいいけど」

香々美は納得顔で腕をほどいた。

「さ、早く朝ごはんを召し上がってください」

「はいはい、わかったよ」

そう言っ、香々美は後ろに手を振りながら部屋を出て行く。そして、リビングへと階段を降りていった。

## 第一章「出発前」      その二

「……うゝむ……この式の最小値は……？」

指でシャープペンをくるくる回しながら、雑音は机の上のプリン  
トを眺めている。

『幽霊研究会』の部室の一角。さんさんと照っている太陽の下で恋人探しに励んでいるセミの鳴き声をBGMに、ごくたまにカーテンを揺らす風の涼しさを頬で感じながら、乱雑に並べられた四つの机の一つに、雑音は陣取っている。

壁時計の針が示す時間は、九時十分。

土曜でも日曜でも、まして休日でもない純然たる平日に、午前中のこんな時間から高校一年生たる雑音が何の咎もなく一人部室にいられるのには明確な理由があり、それは現在、日本全国の高校において夏休みと呼ばれる期間の内だからである。

グランドの方からは、高校球児たちの掛け声がひっきりなしに聞こえてきている。雑音にも聞き覚えのあるクラスメイトの声が数人分混ざっており、数式をこね回している頭の片隅で彼らの顔を思い浮かべながら、雑音はよくやるもんだと半ば呆れたような感想を抱いた。が、それ以上は好感も悪感も浮かべずに、ただ黙々とシャープペンを動かしている。彼の現在の最重要課題は、目の前の数学の宿題なのである。

汗が伝っている首を撫でながら、そのじめじめした暑さに雑音の集中が途切れそうになった場合で、ドアの外、廊下の方からとんとんという足音が聞こえてきた。

その音が最大音量に達したところで、

「おはようー」

入口から颯爽と部屋に入ってきた女子生徒。部室を見回し、そして首をかしげて、

「あれ？ あんただけ？」



「ああ、みんなして遅刻だ」

雑音はプリントから顔も上げず、ややぞんざいに答えた。

すたすたと部屋の中程に進み、そこにあった机の上に鞆を降ろした、セミロングの黒髪を耳下で外にはねている、寄り目がちな女子

東香々美 は「やれやれ」というような顔をして、

「まったく、集合時間を守れないなんて、皆なつてないわねー」

「言っとくけど、君も十三分の遅刻だぞ」

雑音は数学のプリントを見下ろしたまま、声だけ投げかける。しかし香々美はそのセリフを軽やかに無視して、

「んー、つまらないな。皆が来るまで暇ね。何かしようよ、小林君。しりとりとか、山手線ゲームとか、逆野球拳とか」

「……………逆野球拳？」

手を止め、いぶかしんだ表情で顔を上げる雑音。

香々美は右手人差し指を天井に向け、

「そ。負けた方が涼しくなっていてありがたいっていう、優劣が逆転した斬新な野球拳よ。楽しいし涼しくなるしで、一石二鳥の権化とも言えるゲームね。どう、いいアイデアでしょ？」

得意げな表情で香々美は胸をそらす。

雑音はその様をジト目で眺めながら、しばらく閉口した後、

「……………そんなのは左とやってよ」

「それもそうね。小林君の裸なんか見てもおもしろくないし」

香々美は含み笑いで顔を逸らし、鞆からプラスチックの下敷きを取り出してはたはたと仰ぎ始めた。

裸になるまでやるつもりなのか、と言うか君が勝つことが前提なのか、と言うか負けた方がお得な勝負じゃなかったのか、などというツツコミが雑音の頭に浮かんだが、口に出すのもばかばかしいかだったので、口には出さなかった。代わりに、はあ、と諦めたようなため息を吐きながら、雑音は再度数学の問題へと戻る。

雑音の視界の端、下敷きを片手に窓の方へ寄って行き、真っ青な空と真っ白な雲を眺めながら、香々美は

「……………早く皆来ないかな。明日の打ち合わせとかしなきゃなんないのに」

そう呟いた。そしてつまらなそうな表情で、グラウンドを走り回っている野球部を見下ろしている。

だったら自分のように宿題でもやればいいのに、と雑音は思ったが、この前の期末テストの成績を鑑みるにそんなセリフを香々美にぶつける資格は自分にはないように思えて、やはり言わないでいた。こんなに暇そうにしているのに自分より成績がいいのはポテンシャルの違いなのか、それとも真面目にやっているからこそ暇になるのか。どちらにしろ、雑音にとっておもしろくないことには変わりない。

窓に乗り出した姿勢のまましばらく下敷きをベンベン鳴らしていた香々美は、

「そっぴや、小林君。何か情報見つかった？」

ふと思いついたように雑音の方を振り返った。

雑音はペンをかりかり動かしながら、

「情報？　って、『藁人形』のこと？」

「そう。何かあった？」

「いんや、特に何も」

「そう」

肩をすくめ、話はこれで打ち切りとでも言うように、香々美はまた窓の外を見やる。雑音はちらつと顔を上げて香々美の顔を覗いたが、その表情には特に落胆した様子は見られなかった。

数ヶ月前、この『幽霊研究会』入ってこの東香々美と出会った直後、「実は私、『藁人形』に興味があるの」というカミングアウトをされてから、雑音そして『幽霊研究会』の面々が、香々美からちよくちよく聞かれる質問である。

「『藁人形』について何か知らない？」

「『藁人形』の新しい情報が手に入ったら教えてよ」

と、数週間に一度程度尋ねられるのである。新しい情報は何もな

いことを告げても別に気分を害したり残念がったりする様子も見られないので、そこまで執心してるとも感じられないが、しかし断続的には聞いてくる。『藁人形』という存在が存在だけに、香々美がそこまでこのコードネームを気にする理由は、彼女と知り合って間もない雑音には聞きづらいことだった。

まあそのうち聞ける機会もあるだろうと、雑音が数式に意識を戻そうとした時、

「遅れてすいません」

入口の方から男の声がした。雑音と香々美が同時に振り返ると、ブレザー姿で白い肩掛け鞆を脇に垂らした、ぼさぼさ頭で細目の男子生徒がドアの近くに立っている。

「もー、遅いですよ、八代先輩。会長としての自覚が足りないんじゃないですか」

香々美は口を尖らせながら言う。

八代は頭をかきつつ歩を進めながら、

「いや、電車が遅れてまして」

申し訳なさそうな顔を香々美と雑音に向けた。そして窓側の席に腰を降ろし、

「どうやら僕が最後だったみたいですね」

「最後？ まだ左君が来てないですよ？」

「ああ、十二街君は、今日は休みだってメールが来ました」

八代は細目をさらに細めて言う。香々美は腕を組んで肩を怒らせながら、

「まったく、左君ったら、明日からの合宿の最終確認しなきゃなんないのに」

「まあ、サッカー部の試合があるそうなので仕方ないですよ。三人でやりましょう」

「……はい」

渋々というように香々美は自分の鞆の方へ行き、その中から『幽霊研究会』合宿のしおり」と銘打たれた冊子を取り出した。そし

てイスに腰を降ろし、その冊子をぺらぺらと開く。

雑音も計算問題を解いていた手を止めてシャープペンを机の上に転がし、同じように自分の鞆から同じ冊子を取り出した。

二人の準備ができたのを見て取った八代は、

「とは言っても、ここに書いてある通りなんですがね。タイムテーブルも変更はありません。集合場所も時間も前に言った通りです。遅れないで下さいね。……………ええと、あと、ナガツキさんは参加するんですか？」

「あ、はい。ナガツキちゃんもぜひ行きたいって言っていました」

「そ、そう、そうですか」

答える八代の声音が、少し高くなった。

その変化に気づいて雑音が八代の顔をうかがうと、彼は少し口元を歪めている。まるで笑いを噛み潰しているような表情。八代がナガツキに対して普通以上の感情を抱いているのは、雑音には分かりきっていることであり、この反応も「またか」と嘆息する程度のものであった。香々美も気付いているのかは、雑音にはあずかり知らぬことであるが。

香々美が部活に連れてきたこともあり、雑音も過去数回ナガツキを見たことがある。浮世離れた容姿と雰囲気印象的だった。雑音にも、八代の思いが分からないでもない。見とれるには十分な容姿だった。さらには式神という属性が、『幽霊研究会』の会長の立場に留まる八代のような人間にはなおさらなのだろう。合宿でナガツキと合間見える時の八代の浮かれっぷりを想像して、雑音は再度嘆息した。

八代は狼狽を取り繕うように、

「ま、まあ、ナガツキさんのような超常的存在がいれば、今回の我々の目的も達成しやすくなることでしょうし」

「目的？」

「ええ、そうですよ、東さん。まさか忘れてませんよね、この合宿の目的を？ しおりの一ページ目にもちゃんと書いてあるじゃない

ですか。この由緒ある『幽霊研究会』の悲願。そう、『幽霊に出会う』ですよ。この目的のために我々はわざわざ数十キロも離れた合宿所まで出向くわけなんですから。僕達は遊び部じゃないんです。あのEXP部とか何とかいう、ユルユルな部活とは違うんですよ」

「……それじゃ経験値ですよ、会長」

「とにかくつ、機材も十二街君が調達してくれるようですよ、あとは我々の心構えしだいですよ。今年こそは今年こそは、幽霊との邂逅を達成しましょう！ この『幽霊研究会』の名にかけて！」

叫びながら、八代はドンと机を拳で叩いた。

その音に一瞬肩を震わせた雑音と香々美は、八代に対して、えさを運ぶアリの行列を眺めるような視線を向けるだけだった。

## 第二章「到着」

### その一

山間の道を、バスが進んで行く。

高校の最寄り駅に集合し、二回ほど電車を乗り換えて、そこからバスで二時間。窓の外の景色は、駅の界限とは　まして高校の近辺の町並みとは　もはや完全に打って変わっていた。

左右を山に挟まれていて、その傾斜は森で覆われているばかり。コンビニどころか、民家すらたまにしか横切らない。田舎というより未開拓地に近い風景。コンクリート以外の人工物がほとんどないような場所なのである。

しかし、そんな閑静な風景とは裏腹に、バスの中は遠足気分の賑やかさに包まれていた。

乗客は五人　小林雑音、東香々美、ナガツキ、八代弧主、十二街左　つまり、『幽霊研究会』の一行だけ。皆、後ろの方に固まって座っている。バスの中の人間は、彼ら以外には運転手だけ。車両の中程は空白なのである。

そんな中、後部座席の真ん中に陣取った、茶髪で眼鏡の男　十二街左　が、両隣の八代と雑音を巻込んでウノを開催している。左は、前の席についている折りたたみのテーブルの上に黒いカードを出しながら、

「行きますよ、会長！　ドウロフォー！」

「残念、僕もドウロフォーです。小林君に八枚ですね」

「いや、僕もドウロフォー持ってますよ。左に十二枚です」

「なにー！　ちょっと、酷いよ、雑音君！　俺らの友情はどこに行つたんだ！」

「そんなもんが見えてたのか？　眼科か精神科に行くことを勧めるよ」

「ツツコミにも愛がない！」

叫ぶように言いながら、左は山から十二枚のカードを引いた。

八代はそれを見届けると、

「小林君。次の色は何です？」

「じゃあ、黄色で」

「はいはい」

快活に言つて、八代は黄色の九を出す。雑音は、その上に赤の九を被せた。

自分の二十枚の手札を眺めていた左は、ふいに不敵な笑みを浮かべ、

「……ふふふ。雑音君。君には友情を裏切った代償を払ってもらわなければならないね。その準備として、まずはリバーズを出させてもらうよ。これで君は俺の次。俺の攻撃を直接食らうわけだ。ふふふ。さあ、次のターンからの俺の総攻撃に恐怖するが」

「もう一度リバーズ」

「あああ！ ちょっとそれはないでしょ！ もう俺の手札にリバーズないのに！」

唾を飛ばして叫ぶ左。口を拭いつつ左が赤の一を場に出すと、自分の手札をためすがめす見ていた八代は、

「うーむ、十二街君に回すと怖いですね。では、スキップを二枚、出させてもらいます。二回飛ぶので、次は小林君ですね。あと、ついでに僕はウノです」

「ああ！ 会長までひどい！」

一方、その一つ前の座席では、香々美とナガツキが並んで座っている。

窓際の席に座ったナガツキは、窓枠に肘をついて頬を手で支え、ぼーっと流れる景色を眺めている。

その隣、通路側の席では、香々美が携帯電話を熱心に見つめていた。

ふと、香々美のあまりに真剣な様に気付いたナガツキは、

「主、何をご覧になつて居るのです？」

「ん？ メールの子エックだよ。新しい情報が来てないかなあつて」

「……まさか『藁人形』ですか？」

「うん、そう」

香々美は首肯。

「主はそんなに、その『藁人形』に興味があるのですか？」

「まあ、ね。……一応、おばあちゃんの敵をとつてくれた人だから」

香々美は尻すばみに言う。

『おばあちゃんの敵』。

このセリフを言う度に、思い出したくない、忘れない、しかし忘れられない思い出　否、ただの記憶の断片が、香々美の脳裏に浮かぶ。

家に帰ると母親がやけに悲しそうな顔をしていて驚いたこと。その直後に祖母の死を知らされて愕然としたこと。犯人は闇の業界のヒットマンで、祖母は流れ弾に当たって殺されたという悲劇。葬式で祖母の死顔を見たときの怒り、悲しみ。犯人が数ヶ月一向に見つからず、その間ずっと味わい続けた苦汁。

そして、それを打破した『藁人形』。

十年以上前の出来事だというのに、香々美の中にいまだに鮮明に望んでなんかないのに、やたら鮮明に　残っている。そんな思い出　否、記憶の断片。

事件が解決　一応の、名目上の解決　をしても、結局香々美の中のものもやしたものはなくならなかった。過去は過去でしかなく、悲しみは悲しみでしかない。消えるまでは消えない。癒えるまでは癒えない。忘れるまでは　忘れられない。

そしてその香々美の中の『もやもや』は、ほどなくして『藁人形』への興味へと移り変わった。

図書館で新聞を片っ端から調べたり、書籍を探したり、インターネットで検索したり。そして昨日、ホームページまで開設した。



人殺しで金を得ている人間をターゲットにしていること。

首都圏界限で活動していたこと。

十二年前の『仕事』を最後に、音沙汰がないこと。

そして『仕事』には刃物を使っていること。

結局、香々美が知り得たことはこれくらいのものである。これらは皆、一般的にも知られていることだ。つまり、調べても目新しいことは見つからなかったとも言える。

まあ、しかし

調べ始めて、まだ数ヶ月だ。そんな簡単に細部まで分かるなら、警察だって苦労していないだろう。香々美が探っているのは、そういう情報なのだ。

まだまだこれから　と、自分に言い聞かせるように香々美は呟いた。ナガツキには聞こえぬよう、小さな声で　ナガツキに悟られぬよう、表情には出さずに　ナガツキに不審がられない程度の、たかだか数秒の間に　この回想と決意を終えた。

その巡り巡った香々美の心情に気付くことなく、ナガツキは会話を続けて、

「つまり主は、その『藁人形』に感謝している、ということですか？」

「違うよ。感謝とかそういうことじゃないよ。ただの興味。その『藁人形』がどういう人間かってことを知りたいだけだよ。殺し屋殺しとは言っても、犯罪者には変わりないんだから」

「香々美ちゃん、まだ藁人形なんて調べてんの？」

いきなり、左が椅子と椅子の隙間から顔をのぞかせて言って来た。その隣では、

「おい、左！　自分がビリになりそうだからって、逃げるなよ！」と雑音が抗議しているが、左は聞こえない振りをしている。

香々美は携帯から顔を上げ、薄い微笑を左に向けて、

「うん、そう。何か分かった？」

「いや、何もないね」

左はふるふるとかぶりを振る。

「なんせ十数年前の話だからね。調べようがないよ。　　とい  
うか何でまた、そんなこと調べてるの？　まさか香々美ちゃんて、  
そついう危ない人が好みとか？」

「ふふ、違つよ。これはただの興味。私の好みは、明るい性格で頭  
もいい人だよ」

「ん？　そりやまるで俺みたいな人だね。もしかして可能性がある  
のかな？」

「あははは」

香々美は、冗談めかしたように　　あるいは、照れているように  
笑った。その微妙な　　もしくは絶妙な表情に、左は何一つ気付く  
様子はないが。

と、左の隣でカードをまとめながら二人の会話を聞いていた雑音  
が、おもしろくなさそうな顔で、

「……しかし、『藁人形』が色々動き回つてたのは十一、二年前。  
その当時にそいつが二十台だとしたら、今現在はもう、若くても三  
十代のおっさんでしょ？　どんな人間か分かったところで、何の得  
にもならないと思うけど」

「だから、ただの興味だつて言つてるでしょ。どんな人間か知つた  
からつてどうするつもりもないし、喜ぶつもりも残念がるつもりも  
ないよ。まあ別に、雑音君からの情報にはほとんど期待してないか  
ら、君の心配はご無用です」

「……ふん、そうかい」

煮え切らないように言ながら、雑音はカードの束をテーブルに打  
ちつけて揃え、ケースにしまった。

## 第二章「到着」

### その二

周囲を森に囲われた　というより、木々の隙間にぽつんと建っているように、幽霊研究会の合宿所はあった。

丸太を積み上げたような、いわゆるロッジのような作りの平屋。ある程度の年代は過ごしているであろう、壁はいくらか黒ずんでいる。

この合宿場は、元々はこの『幽霊研究会』のOBが親から受け継いだものである。しかしその大先輩はこの建物を持て余しており、またこの辺りの森は霊験あらたかな場所として過去に二三度テレビでも紹介されたような割かし有名な場所で、それが丁度いいということで、例年夏休みの四日間、現役生に貸し出されるようになったものである。しかし、その辺の詳しい事情は減部員の誰も預かり知らぬことになっていた。現在『幽霊研究会』との実質的なつてを持っているのは、このロッジの管理を任されている、近くの町に住む家事手伝いの女性なのである。

そんな建物に相對して、

「へー、これが合宿場ですか。森の家って感じですね」

と、開口一番、左は高らかに感想を口にした。

その横、八代がロッジの玄関の前に立ってチャイムを鳴らすと、キンコーンと言う音が中に鳴り響いたのが聞こえてきた。ほどなくして、ぎいと扉が開く。

そこから出て来た、後ろ髪を結って赤い髪留めをした女性

長な

居がい見あきこ子

は、はにかんだような笑顔を浮かべて、

「幽霊研究会の人たちね。いらっしやい」

「お久しぶりです、長居さん。四日間お世話になります」

軽く会釈をしながら、八代が応えた。そして腕を横に広げ、

「ええと、彼らが今年入ったメンバーです。このスポーツがりの子が小林君、こっちの茶髪の子が十二街君、こっちの黒髪の女の子が

東さん。皆一年生です。あと、こっちの白い長髪の女の子が、東さんのお友達の大ガツキさんです。部員ではないんですが、興味があるそうで、参加して貰いました」

「そう。皆、何か初々しいわねえ。初めまして。私は、一応この管理人の長居です。宜しく」

膝に手を当ててお辞儀をする長居。それにつられて、初顔合わせとなる四人もぺこりと上半身を傾けた。

「さあさ、疲れたでしょ。中に入って、荷物を降ろして　　つて、そっちの、ええと、十二街君……だっただけ？　何か、すごい荷物持つてるわね。それ何？」

「あ、これですか？」

言いながら、左はしたり顔で背負っていたもの　テレビのような大きさ、形の黒いバッグ　を足元に降ろした。そしてその上面をぱんぱん叩き、

「これは『幽霊探知機』ですよ」

「幽霊……探知機？」

「ええ。集音器とガウスメータを合わせたようなものです。何でもこの辺りの林は、その筋で有名な心霊スポットって話じゃないですか。だったら、その音や電磁波を集めれば、幽霊の存在が確認できるんじゃないかと思って、持ってきたんですよ。今夜早速試してみるつもりなんです」

「そ、そう……。そう言えば、これは幽霊研究会の合宿だったわね」  
長居は引きつったような笑みを浮かべる。

「ま、まあ、そこまで本格的なら、今年は出会えるかもね

さあさ、とにかく中に入って入って」

扉を開け、中に入るよう促す長居。五人は「おじゃまします」と言いながら、そのロッジの中に足を踏み入れた。

「へえ」

ロッジの床に荷物を降ろしながら、雑音が感嘆を漏らす。思っていたより　外観から推測していたのより　なかなか広い建物だ

った。

壁も床も天井もすべて丸太を削ったもの。玄関もなく、すべてのスペースが土足だった。入口を入れてすぐに大きなテーブルと椅子が据えられたリビングのようなくつろぎスペースがあり、その脇にキッチンがついている。その奥にはそのまま一本の長い廊下が見え、両脇に部屋の扉があった。部屋の数はいくつで八個　右に四つ、左に四つ。その奥にトイレのマークがついたドアが見える。

五人ともが中に入ったのを見て取ると、長居はドアを閉め、

「まずは荷物を置こうか。奥に八つ部屋があるから、一人一部屋ずつ、好きなところを使ってちょうだい。あと、この建物の説明は

説明って言うほどのことじゃないけど　一応、電気もガスも水も電話も通ってるわ。だから料理もできるしお風呂も入れるわよ。滅多にないだろうけど、ブレーカーは外の玄関の横にあるから、落ちちゃったらそこを上げてちょうだい。そうね、じゃあ少し休んだら、もう五時だし、夕飯の支度をしましょうか」

### 第三章「第一の事件」      その一

長居は、夕飯の前に帰っていった。

元々そういう予定だったらしく、実はここ数日、彼女の母親が風邪をこじらせて体調を崩しているとのことだった。その看病をしなければならぬというわけである。夕飯が完成した直後、八時前に合宿所から数キロメートル離れた彼女の実家へと、車（長居の自家用車）で出て行った。

ということで、夕飯のテーブルは五人で囲んでいる。

テーブルの上にはシチューやロールキャベツ、ポテトサラダといったメニューが並べられた。長居が用意してしてくれた材料で、長居とナガツキと香々美、そして左が作ったものである。家庭科の授業以外に料理の経験がないという雑音と八代は、風呂掃除やベッドメイキングなどの雑用の役目を与えられ、料理にはノータッチということになった。

それらの仕事が終わったのは、料理が完成した場合。

かくして、できたてのメニューを全員で囲むに到ったのである。

「いただきます」

という号令と共に、それぞれ料理に手を伸ばし始めた。最初にスプーンを握ってシチューをすすった八代は、

「うん、なかなか美味ですね」

「そうですか？ えへへ。それ私とナガツキちゃんで作ったんですよ」

「何と！ これがナガツキさんの手料理だったのですか！」

「ナガツキちゃんと『わ・た・し』の手料理ですっ」

口を尖らせる香々美。

しかしそんなことお構いなしに八代はシチューをかき込みつつ、「いやー、ナガツキさんの手料理を食べられるとは、もう恐縮の極みです！ 感動で泣きそうですよ！」

「は、はあ……それはよかったです……。沢山あるので、どんどん食べてくださいね」

「はい！喜んで！」

冷や汗を垂らしながら笑うナガツキに、八代は元氣よく応える。

その隣、雑音がロールキャベツを食べる様をまじまじと見ていた左は、

「どう、雑音君？ そのロールキャベツ？」

「え？ ああ、まあ、うまいんじゃない？」

「でしょー。ふっふっふっ。聞いて驚いてよ。実はそれ、俺が作ったんだよ」

「……へー」

「ちよつと、何、その薄い反応は？ もつと感心するとか、驚きのあまり椅子から転げ落ちるとか、感動のあまりむせび泣くとかあるでしょ……。まあ、雑音君は照れ屋だからね。分かってるよ。感情を表に出すのが苦手なんだよね。大丈夫、僕にはちゃんと伝わってるよ。淡泊な反応だけど、本当はおいしいんでしょ？」

「……まあ、味は悪くないけど」

「どう？ 惚れ直した？」

「気味悪いこと言うな！ 直すも何も、惚れた覚えもないし、今後一切そんな予定もない！」

感情を隠すことなど微塵もなく、ツツコむ雑音。

そんな会話を繰り返しながら、しばらく食事は続いた。

結局、全員が つまり、一番食べるのが遅かったナガツキが食事を終えたのは九時過ぎだった。

その後は、左は幽霊探知機のメンテナンス、八代と雑音と香々美はテーブルの上でウノ、ナガツキは流し台に立って洗い物と、それぞれの時間を過ごしている。

そんな中、自分の手札を眺めていた雑音は、思い出したように台

所の方に顔を向け、ナガツキに話しかけた。

「……そう言えばナガツキさん、気になったんだけど」

「はい、何でしょう？」

ナガツキは洗っていた皿を置き、振り返る。

「ナガツキさんが持ってきた、あの黒くて長い荷物って何なの？」

ほら、肩にかけて持ってきてたでしょ。あれ」

言いながら、雑音は部屋の隅の壁を指差した。そこには、野球のバットや剣道の竹刀をしまうような、細長いレザーのバッグが立ってかけてある。それを見たナガツキは合点がいったように、

「ああ、あれですか？ あれはですね」

エプロンで濡れた手を拭いっつ、その荷物の方へと歩いて言った。そしてそのレザーバッグを手に取って、

「こういうものです」

そのジッパーを下ろした。そこから出てきたのは、赤い柄と黄金色のツバ、そして黒い鞘が被せてある、金属光沢を輝かせた

「日本刀？」

「はい、そうですよ」

満面の笑みを浮かべながら、その刀を手に取るナガツキ。

「どうです、これ？ なかなかいいものなんですよ。江戸時代に名を馳せた京都の刀鍛冶、緒方六右衛門が、生涯に作った全百八本の刀のうちで最高傑作と謳われたもので、各地の大名がこれを手に入るために様々な謀略を重ねたと言う　　って、皆さん、何を

そんな驚いた顔をなさってるんです？ そんな目を開け広げて……

……あ、そうですね。皆さん、現代日本では、刀を見る機会なんてそうはありませんよね。珍しいですよ。ええと、日本刀と言うのはですね、打刀や脇差、長巻など様々な分類されてまして」

「いや、違う。僕達が驚いてるのは、そういうことじゃない」

驚愕の表情を浮かべたままの雑音は、ふるふると首を左右に振り、「僕達が驚いてるのは、そもそも君が何で日本刀なんていう銃刀法違反に真っ向から対立するようなものを持っているのか、しかも何



でそれをこの合宿に持つてきたのか、付け加えて言うなら君はそれを持参することに何の疑問も持たなかったということだ」

「ああ、これは主のお母様から預かったものなんですよ」

「……香々美の母さんから？」

「ええ、合宿とはいえ、殿方と一つ屋根の下で過ごすわけですからね。何か間違いがあつたら大変だと言うことで、護身用に持たせてくださったのです」

「……その武器じゃ、護身〃殺人になるよね？」

「式神とその主人は、離れていてもある程度の意思疎通ができますから、主が危機を感じたらわたくしが一目散に向かいます。ですから、粗相のないようにしてくださいね？」

ナガツキは刀を握つたまま、につこりと笑顔を作つた。

その眩しくも悪寒を感じさせる微笑を眺めながら、雑音は隣の八代の腕を肘で突付き、

「……気をつけてくださいよ、会長？」

「……ああ、気をつける」

呆然としたまま、八代は顎だけ縦に動かした。

### 第三章「第一の事件」

#### その二

「ねえ、何か見つかるかな？」

わくわくしたような声音で香々美が言う。クリスマスプレゼントの箱を開けようとする子供のような表情。しかし、その隣に横に並んで立っている雑音は、

「さあ」

と気のないように首を傾げるだけに留まった。その隣にはナガツキと、さらに隣にマイクを握って立ち尽くしている八代がいる。

そしてその四人の視線の先には左の背中。地面に膝をつき、『幽霊探知機』の本体の上面についているノブを真剣な表情で色々いじくっている。

彼らがいるのは、合宿所の外。建物の横の林の中である。

建物のすぐ側なので、そこまで暗くはない。窓からこぼれている光のおかげで、懐中電灯を使わなくても周囲は見えている。時折、そこら中を飛び交う虫が光を遮るくらいである。

辺りには、鈴虫の鳴き声だけが響いている。

この合宿所の半径三キロメートルの範囲には民家はない。一帯が林。長居の実家がある町がここから一番近い人里である。なので、この地域は騒音とは無関係。夜になれば道を通る車の音すらも聞こえなくなる。

そして、このような人里離れた場所で時折噂されるのが、いわゆる心霊現象なのである。

過去に自殺者がいた。猟奇殺人があつた。幽霊の目撃例がある。事実かどうか分からないこの地域を舞台とした事例が、まことしやかに囁かれている。とある雑誌には、この場所は霊魂が集まる場所として記されたりもした。

一般人には「くだらない」と切り捨てられてしまうような記事であるが、しかしそのような怪談話が人の世から消えないのはそれに

興味を持つ人間が少なからず存在するからであり、そのような人間が集まるのが『幽霊研究会』なのである。

合宿をする際にうってつけな場所だということでのこの合宿所が選ばれたのか、それともこのような場所を見つけたから合宿をするようになったのか、現部員には知るべくもないことである。ただ、毎年研究会の部員は夏休みにこの合宿所に出向き、心霊の調査をするというのが慣例になっていた。

加えて、今年は高性能な武器がある。

たった今左がセットしている『幽霊探知機』。元々幽霊の類に興味があつた左が、自分の小遣いを溜めて通販で買ったものである。つまり、左の私物だ。

取扱説明書によると、電磁波と音波で幽霊を探すものらしい。現在八代が握っているマイクがいわゆるセンサーで、そこから音と磁力を探查する。そしてその信号がコードを伝って左がいじくっている本体にたどり着き、その側面の液晶パネルに波形が出るという仕組みだと、説明書に書いてある。その仕組みがどれだけ信頼が置けるものなのかは、左にも分かっていないが。

「よしっ」

と頷きながら左は立ち上がった。セッティングがうまくいったのだろう、満足げな顔で『幽霊探知機』を見下ろしている。そして八代の方を振り返り、

「では、会長。そのセンサーを空中に晒してください」

「え？ こ、こうですか？」

八代はマイクを握った手を上に上げた。頭の上くらいの高さ。腕が震えているのだろう、小刻みに左右へ動いている。

それを確認すると、左は再度ディスプレイに目線を下ろし、

「……うん。反応は見られませんね。もう少し待ちましょうか」

「こ、このままですかあ？」

八代は弱々しく言う。

そして一分、二分、三分、四分、五分……………。

「……あ、あの、僕、もう腕が痛いんですけど……」

「会長、頑張ってください！」

「会長、頑張ってください！」

「ここで頑張らなかつたら会長じゃない！」

香々美と雑音と左がやんやんやと言つ。八代は腕を震わせながら苦しそうな表情で、

「し、しかし、君たち、そうは言っても、僕の腕は………」

「ほら、ナガツキちゃんも、八代先輩を応援して！」

「え？ あ、はい。えーと……… 八代様、頑張ってください」

「うおー………」

叫びながら、八代はさらにいつそう高く手を上げた。辺り一面から、鳥がばさばさと飛び去る音が聞こえてくる。

そして、一時間後。

「……うーん、見つからないね」

ディスプレイを見つめながら、左は首をひねった。

それを横から覗き込みながら、香々美は、

「何だろね？ 場所が悪いのかな？ それとも時間？」

「両方あるね。明日は色々場所を移動しながら探してみようか」

「そうだな。まあ時間はたっぷりあるし、地道に探すか」

「あ、だったらわたくし、明日の皆さんのお弁当を作りますよ」

四人は『幽霊探知機』を囲んで話し込んでいる。その奥には、

「……くっ、はっ、はっ、はっ」

右腕を抱え、地面に突つ伏す八代。ゆっくりと顔を上げ、話し合っている四人の方を見ながら、

「……あの、ですね、君たち……… ちょっと、思ったんですけど……… このマイクを高い位置に据えておきたいんならね………」

……そこら辺の木にでも、紐でくくりつければ」

「さ、みんな、もう戻りましょ」

香々美がパンと手を叩き、呼びかけるように言う。

「もう十時ですよ。明日も活動しなくちゃならないんですから、早くお風呂入って、早く寝ましょ。ほら、会長、ぐずぐずしてないで早く行きますよ」

「……………はい」

八代はうつむきながら、よろよろと立ち上がった。

### 第三章「第一の事件」

#### その三

『幽霊探知機』は明日も使うということで、合宿所の入口の脇に置き放したままで、五人は建物の中に入った。

最後尾、香々美は入口のドアを閉めて鍵をかけると、前方の四人に向かって、

「あ。さっきお風呂のお湯入れておいたんで、もう入れると思いますよ。じゃあ……年功序列ということで、八代先輩からちゃっちゃと入っちゃってください」

「え？ いや、僕は少しナガツキさんと団らんしてから……」

「もー、ぶちぶち言っただけで早く入ってくださいよ。先輩には早く休んでもらわないと。明日も頑張れないじゃないですか」

「はいはい、分かりましたよ………って、ええ！ 明日も？ 明日もあれをやるんですか！」

「ほらほら、行った行った」

しっしと言うように香々美は手を振る。その「反論はすべからく聞く耳持ちません」というような表情に反抗を諦めたのか、八代はすぐごと自分の部屋へ戻り、洗面具と着替えを抱えて風呂場の方へと歩いていった。

そして残りの四人は、再度それぞれの時間を過ごし始める。

ナガツキは洗い物の続き。他の三人はテーブルに向かって、雑音は読書、香々美は携帯のメールチェック、左は自分のバッグから別の心霊グッズを取り出してきていじくっている。たまに他愛ない会話をキャッチボールする程度で、ゆったりとした時間が過ぎていく。

そんな中、左はふと何かを思いついたような顔をして、ポータブルゲームのような機械をいじっていた手を止めた。そして台所の方を振り返りながら、

「そう言えばナガツキさん。さっき何か感じなかった？」

「何か……と言いますと？」

「だから、幽霊に関する何かだよ。霊気を感じたとかさ」

「霊気………ですか？ ……いや、別にそういうことは……」

困ったように答えるナガツキ。

今度は雑音が本から顔を上げて、

「………というか、ナガツキさんって、幽霊と関係あるの？ 一応、精霊なんでしょ？」

「はい。わたくしは自然界の精霊、詳しく言えば草の精霊です。この辺りの植物を見守り、慈しみ、そして愛でるのがわたくしの精霊としての仕事になります」

「それって、幽霊とは違うの？」

「はい………まあ、幽霊の定義がよく分かっていないのですが、死んだ人間の意志から生まれるとか、死後の世界からこちらに渡って来るものだというのなら、明らかに違いますね。わたくしは最初から精霊として存在し、常にこの現世に身を置くものですから」

「………じゃあ、現世以外の世界っていうのも、あるの？」

「さあ、分かりません」

ナガツキは首を横に振る。

「わたくしはこの現世しか知りませんので、あるのか、あるいはないのかも、まったく分かりません」

「………そっか」

たいして気落ちした風もなく、雑音は頷いた。

そもそも、それを知っているなら香々美がナガツキからすでに聞き出していたらうし、香々美がそれを部員に知らせていただろう。しかしそんな話はまったく聞いたことはなかった。つまり、香々美もナガツキから聞けなかったということ、ナガツキにも分からないことだということ。元々予想していた通りだ。

雑音は手元の本のスピンをページの間に挟みながら、

「………じゃあさ、話変わるけど、ナガツキさんってどうやってそうなったんだ？ ……ええと、つまり、その体は一体どうやって手に

入れたんだってこと」

「ああ、この体は人形なんですよ」

答えながら、ナガツキは自分の白い腕を撫でる。袖からのぞいたその肌は、もはや色白とは呼べないほどの　　まるで絵の具のような　　白だった。

「主がピンチに直面しまして。それを救うためにわたくしは呼び出され、その時主が持っていた人形にとり憑いて、この世界に降り立ったというわけです」

「……そのピンチって言うのは？」

「子猫がトラックに引かれそうになってたんです」

懐かしむような、あるいは主人の行動を誇るような笑顔で、ナガツキは言った。

「主の目の前で子猫が道路に飛び出して、そこにトラックが向かってきまして。そこでわたくしは呼び出されたのです。主の鞆に付いていた人形に。それで、わたくしは急いで道路に飛び出して、子猫を抱え上げて、間一髪　　」

「助かったのか」

「はい、猫は無事でした。わたくしも足が吹き飛ばされるだけで済みましたし」

雑音と左はあんぐりと口を開ける。

「……え？　じゃあ、その足は？」

「この体はあくまで人形ですから。修理すれば簡単に直ります。そもそも、物理的な手段だけではわたくしを消し去るのは不可能です。たとえこの体が木っ端微塵になっても、わたくしの存在自体には何の影響もありません。妖刀でも使って、わたくしと人形の　繋がり　を断ち切らない限りは、わたくしは消えません」

「……妖刀、ねえ」

「はい。さっきの日本刀も、実は妖刀の一種なんですよ？　だからあれでわたくしを絶てば、わたくしはしばらく戻って来れなくなりますが、……まあ　繋がり　が断ち切られても、わたくしが死ぬ



わけではないので、また別な傀儡を見つけられただけなんですけどね」

照れたように、あるいは自嘲するように微笑むナガツキ。その笑顔に、雑音と左はどう反応するべきか迷うばかりだった。

と、

「もー。二人ともナガツキちゃんの話ばかりしてないでよ」

携帯から顔を上げ、いじけたような顔をする香々美。その視線からすると、とかく左の方に不満を持っているようである。

雑音は「仕方ない、構ってやるか」というような表情をして、

「……しかし、精霊を呼んでいきなりトラックの前に飛び出させるとは、とんでもないことするな、君」

「しょ、しょうがないじゃない！　びっくりしたんだから！　それに、他に方法はないでしょ」

「……いや、でも、例えば風の精霊みたいのを呼び出して、風でふわっと子猫を移動させたりとかすればさ、誰も怪我せずに済んだんじゃないか？」

「う、うるさいな！　そこまで頭が回らなかったの！　一瞬のことだったんだから！　………まったく、小林君っていつも私に意地悪なこと言うよね。そんなに私が気に入らないの？　それならそれで、お互い様だけだねっ」

しかめっ面でふいつとそっぽを向く香々美。

ふと、首を曲げた先、再度機械いじりを始めた左が香々美の視界に入った。その手元が目止まる。香々美はそこでこねくり回されているものに興味深げな視線を向け、そしてそちらへと寄っていつて、

「ねえねえ、それ何？」

と、話し始めた。

自分のアイテムを自慢げに解説する左と、微笑みながらそれに耳を傾ける香々美。和気あいあいとした雰囲気、あっという間に二人の間にできてしまった。

そんな二人をしばし眺めていた雑音は、ふっとため息をつきながら椅子から立ち上がった。

それに気がついた左が、

「ん？ 雑音君、どこ行くの？」

「いや、ちよつと散歩行ってくる」

「散歩？ なに？ 星を眺めるとか？ ……………へえ、雑音君にそ

んなロマンチストな面があつたなんて、意外」

「余計なお世話だ」

言いながら、雑音はすたすたと外へ出て行った。

### 第三章「第一の事件」

#### その四

木が邪魔で、星はほとんど見えない。

周囲に人口の建造物がほとんどない大自然ということで、雑音も少し期待していたのだが、夏というのがいけなかったのだろう。木々の上には緑の葉が生い茂り、天井を覆い尽くしていた。

唯一合宿所の建物の近く、林が切れているところから、いくつかの星と三日月がのぞいている。雲一つない空で、夜だというのはあまり暗くはなかった。

しかし、見える星が少なすぎる。小一時間眺めて飽きないほどのものではない。

「……ま、いいけど」

と、雑音は呟いた。

別に雑音は本当に星が見たくて外へ出てきたわけではない。目的があつて外へ出てきたわけではない。ただ、あの場所にあまりいなくなつたから、居るのが少し苦しかったから……。

なぜ雑音は、あそこにいるだけで居た堪れなくなればならないのか？

その理由は、実は雑音にも明白で、明確なことだった。ただそれを認識してしまうと、もう後戻りができなくなってしまうようで、苦しむだけのような気がして、言葉にしないだけだった。言葉にしないだけで　分かつている。

香々美が左を見る視線が、気に入らない。

ふいに、ぎいという木がきしむ音がした。そして土を踏みしめる足音がこつちへ近づいてくる。

視線をやると、それはナガツキだった。

白装束にエプロン、足元はスニーカーという、さつき洗い物をしていたときのままの格好。青白い髪を夜風に揺らしながら、こつちに向かって微笑んでいる。

「星は見えますか？」

「いや、ほとんど見えないね」

雑音は素っ気なく言う。

ナガツキはすたすたと雑音の隣へ歩を進め、並んで空を見上げた。そして星を見つめたまま口を開き、

「あの、小林様。一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「え？ あ、ああ。構わないけど」

雑音は慌てて、視線を空に向ける。

ナガツキはその様を横目で見つつ、含み笑いしながら、

「小林様は、何でこの『幽霊研究会』にお入りになったんですか？」

「……僕がこの部活に入った理由？ いや、別に、ありきたりなことだけ」

雑音は頭を掻きながら、

「幽霊に会いたかったからだよ」

「……幽霊に、会いたい？ …………… 会って、どうなさるつもりなんでしょうか？」

「どう……ってこともないけどさ、ただ、幽霊 というより、死者の魂 っていうのが本当に存在するのか確認して、そしてできれば、その魂と話せないかな と、思って……」

「……どんな話をしたいんですか？」

「別に……………今の気分とか、聞きたいかな」

相変わらず空を見上げたまま、口元を歪める笑みを作って雑音は答えた。

「……じゃあ、ナガツキさん。僕からも一つ聞きたいんだけど」

「はい？ 何でしょう？」

「誰かに決められた通りに生きる人生って言うのは、どう思う？」

「……誰かに決められた人生？」

「そう」

雑音は、ナガツキの方へ向き直り、

「例えばナガツキさんは、香々美に仕えるという目的で、今こ

の時を過ごしているよね？　自分で決めたことじゃなく、ただ偶然香々美に呼び出されたから、そういう生き方をしている。そこには君の希望なんてないでしょ？　そういう生き方は楽しい？　そういう生き方に不満を持つことはない？」

雑音の質問に、ナガツキは「そういうことですか」と呟いて、

「確かにわたくしは、自分の意思を優先して行動することはありません。言われるがまま、なすがまま、主の幸せを最優先して行動します。しかし、だからと言って自分が不幸だとは微塵も感じません。生まれた時から何かの型にはめられて窮屈な思いをしているのは、誰だって同じです。それを前提にして、どれだけの喜びや楽しみを得ることができるか。それが幸せな人生ということではないでしょう。うか。人生を他人に決められることと、生きることが楽しいかどうかは、関係ないのではないのでしょうか」

「……なるほど、それは正論だね」

雑音は嘆息しながら呟く。

雑音の声が切れたところで、ふわっと、やや強い風が吹き抜けた。ナガツキの髪が揺れ、林が揺れ、周囲から植物のざわめきが沸き立つ。頬の熱を奪っていく風。景色を撫でるように、吹き抜けていく風に流れる髪を耳元で押さえるナガツキ。その横顔をちらっと見ると、気持ちよさそうに目を細めている。そのたなびく長髪が、まるで風に揺れる草木のように見えた。彼女が植物の精霊であることが、雑音にも　何となく　理解できる。神秘的という言葉が当てはまる。会長は、その雰囲気に着かれたのだろうか？

雑音がそんな思考にたどり着いたところで、

「……雑音様、悩んでらっしゃいますね」

いきなり、ナガツキが断定するように尋ねてきた。

「……………え？」

「自己嫌悪……と言ったら言い過ぎかもしれませんが、しかし貴方はそれに近い状態にありますね。そんな表情をしてらっしゃいます」  
「……………自己嫌悪、ねえ」

言われて、雑音は考え込む。……………これは、自己嫌悪なのだろうか？ 否定はできないが、しかし当たっているともあまり思えない。ただ、『嫌悪』というのは正解かもしれない。

雑音が答えないのを肯定ととったように、ナガツキは続けて、「貴方は一体何を嫌悪されてらっしゃるのですか？ 貴方自身の、貴方の人生の一体何が気に入らないのですか？ 自信を持っていたきたいのです。わたくしは、貴方が十分素晴らしい方だと存じています。本当ですよ。わたくしにとっても、貴方といると心が安らぐというか。……………正直、主よりも貴方といった方が心地いいです」……………心地、いい？」

「あ、いえ、その……………忘れてください」  
慌てて、ナガツキは顔を背けた。おかげで、その時のナガツキの表情は、雑音には見えなかった。

翌朝、七時。

雑音は目覚ましのアラームで目を覚ました。布団から腕だけを伸ばし、頭の脇に置いてある時計の上辺を叩く。ようやくけたたましい音が止んだ。

しばらくベッドの中で唸った後、掛け布団を跳ね除けて上体を起こした。目を擦りながら、大きなあくびを一つする。

寝ぼけ眼で、ぐるりと周囲を見回した。

はて、いつもと様子が違う。部屋の広さも、家具も、このベッドも。そう言えば目覚ましの音も違ったっけな、とそこまで考えたところで、雑音はようやくここが合宿所のロッジの部屋の中であることに思い至った。

「そっか、そうだった」

とひとり言のように言いながら、雑音はベッドの上で一つ伸びをし、ふらふらと立ち上がる。窓に近づいてカーテンを開けると、外は快晴だった。

着替えを済ませ、部屋を出る。キッチンの方へ行くと、テーブルにはすでに八代が座っていた。

「あ、会長、おはようございます」

「ああ、おはよう、雑音君」

モーニングコーヒーを口に含みながら、爽やかな笑顔で答える八代。

雑音はその隣に腰掛けながら、

「会長、昨夜は大丈夫でした？」

「大丈夫……とは？」

「だから、何もコトを起こさなかったかっただけですよ。ちゃんと安静にしました？」

「あ、当たり前じゃないか！」

細目を見開き、叫ぶ八代。

雑音はなおも疑う視線を八代に向けているが、内心では「まあ、そりゃそうだろう」と笑いを殺している。雑音にとつて、これはいつもののかいかいの範疇であった。つまりは冗談である。

八代の反応に満足して、雑音がふっとキッチンの方へ視線を向けると、香々美と左が並んで朝食を作っていた。左はサラダを作っているのだろう、包丁で野菜を切っており、香々美は鍋を覗き込んでスープを混ぜている。二人とも淀みない動作で、てきぱきと料理に従事していた。

この様子を見て、雑音は、はあ、とため息をこぼす。

認めたくはないが、雑音にもぴつたりと一枚の絵に収まる風景だと思える。まるで最初からそういう組み合わせだったとも言ってしまう、並んだ二つの背中。例えば左の位置に自分を当てはめてみても、雰囲気と言うか空気と言うか、そのようなものが不自然になると思えない。相応しさ、とでも言うのだろうか。そんなものを気にするのもどうかと思うが、しかしそれがどうでもいいことも断言できない。問題は他にも色々あると思うが。

雑音の中で、昨夜の気分がぶり返してくる。

ナガツキの意味深なセリフのおかげで、昨夜はむしろそつちが気になって香々美に関する思考がストップしていた。そのせいで、気分は良好とは言わずともニュートラルには戻っていたのだが……。まあしかし、とりあえずウジウジ考え込むのは止めよう、ナガツキさんに励まされたばかりだし、と雑音は思い至った　　と  
ここで、

「あれ？ ナガツキさんは？」

「ああ、それがまだ起きてこないのよ」

香々美が振り返りながら答えた。

「いつもは六時くらいに起きて私の朝食作ってくれるんだけど、今日に限って。まあ、いつもやってもらってるし今日くらいはって思っ  
てそのまま寝かしてるんだけど、だけどそろそろ朝ごはん出来上がるから、ちよつと起こしてきてよ」

「……へいへい」

と気だるそうに言いながら、雑音は立ち上がった。にやけた顔を浮かべ「あ、それなら僕が！」と立ち上がる八代を無視して廊下を進み、ナガツキの部屋のドアの前にたどり着く。そして、

「おーい、ナガツキさん。朝ですよー」

と呼びかけながら、扉をどんどん叩いた。しかし、何の反応もない。

「ちよつと、ナガツキさん！ 早く起きて」

さらに扉を叩いた。だが、相変わらず中から物音は何も聞こえない。

「もー！ ちよつと、入りますよ！ いいですね！」

叫びながらノブに手をかけ、雑音は部屋の中に入っていった。

八畳くらいの広さ。机もベッドも見覚えのある形状。雑音の部屋とまったく同じ造りである。

カーテンが閉められていて少々暗いが、そこに何があるのかくらは分かる。部屋の奥のベッドを見たが、そこはもぬけの殻だった。寝た形跡はあるが、半分めくれた状態で、そこには誰もいない。



「え？　いない？」

香々美はまだ起きていないと言っていたが、実はそのずっと前から起きていたのだろうか？　すでにどこかへ出掛けてたりするのだろうか？　しかし、ここから出掛ける場所なんて思いつかないが、わけがわからず辺りをきよきよと見回すと、部屋の真ん中の床の上、そこに

首を切られた白い人形が、横たわっていた。

## 第四章「迷推理」

### その一

香々美が祖母から式神の降ろし方を教わったのは、彼女が五歳の時　あの事件の数ヶ月前のことである。

香々美の家は分家の分家の分家で、かつて悪霊退治を生業としていた東の本家とは縁遠くになっており、そのしきたりなどはまったくと言っていいほど受け継いでいなかった。ごく一般のサラリーマン家庭。香々美も普通の女の子として育ち、育てられてきた。

悪霊などと言うものとは無関係。

東という苗字の由来、そしてその家の生業も何も知らない、知らされていない。

ただ一つ、式神の降ろし方だけ、密かに伝承が続けられていたのである。

これにも、深い意味があるわけではなかった。仕事は、現在も本家だけが受け継いでいる。このような疎遠な血筋において、伝承を続けなければならないような責務もない。実際、香々美の母親はそんなものの存在すら知らないのである。

それは、香々美を喜ばせようとする、祖母の思いつき。

そして、後年これがこの子の役に立つかもしれないという、薄い期待。

それだけでもって、祖母は香々美にまじないを教えた。何度も何度も、香々美がそれを空で言えるようになるまで繰り返した。繰り返し覚えさせた。

そしてようやく香々美がそのまじないを最後までつつかえることなく言えるようになったところで、祖母は近くにあった日本人形に水の精霊を降ろして見せたのである。

茶の間に飾ってあった、着物姿の日本人形。それに向かって祖母は手をかざし、まじないを唱えた。青白い光を放った後、急に立ち上がった人形。ここはどこだと言わんばかりに、きよろきよろと周

りを見渡し始めた。

「話しかけてごらん」

と祖母が言くと、五歳の香々美はこくりと頷き、恐る恐る人形に顔を近づけながら、

「……こ、こんにちは」

「ああ、やあ、こんにちは」

口が動き、軽快な声が聞こえてきた。口の動きと声の発生が完全にシンクロしている。その様を目の当たりにした香々美は、その目を見開き、口をぽかんと開けた。そしてその顔のまま後ろを振り返る。期待していた通りの表情に、祖母は微笑んで大きくひとつ頷いた。

結局この水の精霊は、香々美と三十分くらい話した後に、あまり引き止めるのも悪いということで還された。幼い香々美は当然のように不満がったが、祖母の

「これからは自分で降ろしなさい」

という言葉に説得され、渋々従った。

そして、香々美が初めて自分で式神を降ろしたのは、その十年後だった。

あの後、家に帰ってから自分のぬいぐるみに降ろそうと何度も試してみたが、一度も成功しなかったのである。まじないは合っているはずなのだが、ぬいぐるみから光を放たれることはなかった。電話で祖母に相談しても、

「ちゃんと心を込めるのよ」

と言われるだけで、具体的な解決策はもらえず。後で祖母の家に行って、もう一度降ろすところを見せてもらおうと思っていた

その矢先の、あの事件。

式神を見せてもらうことはおろか、祖母と会話することすら永遠に叶わなくなってしまうた。

それから数ヶ月、香々美は悲しみと共に暗澹とした日々を送ることになり、式神のことなど思い出さなくなっていたのである。苦しくなるから、悲しくなるから、祖母の記憶をできるだけ思い出さないようにしていた。ただ逃げていた。当時を振り返り、今の香々美はそう思う。

そして結果として『藁人形』へと興味が移りつつも、香々美はごく一般的な学生生活を送っていた。式神とも東家の家業とも完全に縁が切れたような日々。祖母のことも記憶の一つとして心の中にしまい、日常に笑顔を取り戻していた。

その日常に風が吹き込んだのは、去年の二学期のことである。

その日、香々美は帰路を歩んでいた。

大通り沿い、二車線の大きな道路の脇の歩道を歩いていると、ふと、その道路の真ん中に、モゾモゾ動く小さい何かがいた。そしてそれが何なのかと顔を向けて、香々美は驚いた。

それは子猫だった。

生後半年くらい。ものすごく小さい。そんな猫が、道路の真ん中、行き交う車と車の間で動けなくなっていた。助けを呼ぶように、ナーナー鳴いている。

「うわわわっ」

慌てて、香々美はそっちの方へ寄っていった。

早く助けなきゃ、と思うが、車はひっきりなしに通っている。とても飛び出せる隙はない。さらに周りに信号もなく、車は減速する様子すらない。

（こうなったら、無理にでも止まってもらって……）

可々美がそう思ったときだった。

いきなり、子猫が思い立ったように走り出したのである。たたたつと、向こう側へ向かって脚を蹴りだした。

「あっ」

間に合えば、とも思ったが、しかし子猫の脚力。車道を出る前に車が迫ってきて、タイヤと猫がぶつかりそうなタイミング。

可々美は思わず目をつぶった。

かしゅんっ

しかし、聞こえてきた音は決して鈍いものではなく、プラスチックが折れるような甲高い音。恐る恐る目を開けると、目の前には、猫を抱えた

青白い長髪の、白装束姿の少女。

「主、子猫は無事保護できました」

柔らかに微笑みながら、その少女は子猫を差し出してきた。思わず香々美はそれを受取る。

猫を抱えながら視線を地面の方へ向けた際、ふと目に入った着物の裾の下、その少女の片脚は、レンガをハンマーで叩いたように砕けていた。

「わっ、ちよっと、な、何、その脚？ 大丈夫なの？」

「ええ、修理すればどうともなります」

少女は、あくまで笑顔を崩さずに言ってくる。

「しゅ、修理？ というか、血も出てないし。……あ、あなたは一体何なの？」

「うふふ、あなたが呼び出したんじゃないありませんか」

少女はその青い瞳をまっすぐ香々美に向け、

「あなたの式神ですよ、主」

これが、香々美とナガツキの出会い。一年前の出来事である。

この後、香々美は猫とナガツキを自宅へと連れて行き、接着剤でナガツキの脚の修理を行った。そして子猫は家で飼うことにし、ナガツキも出張続きで留守がちな香々美の両親の目を盗んで一緒に住

むことに決定。そうして、現在に到るのである。

ちなみに、「ナガツキ」という名前は、この出来事が九月に起こったからという単純な理由で香々美がつけたもの。ナガツキ自身も特に反対することもなく、この名前に決定した。

思えば、おばあちゃんがその死の直前に式神の降ろし方を教えてくれたのも、運命なのかもしれない。ナガツキちゃんは、おばあちゃんが遣わしてくれたもの。もしかしたら、代わりなのかもしれない。だったら、私はこのナガツキちゃんを大切にしよう、おばあちゃんとできなかった分だけ、たくさん楽しい時間を一緒に過ごそう。

香々美はそう思っていた、そう心に決めていた、のに

「な、なんで、なんで、なんで、なんで、なんで……」

……分かってる、ナガツキちゃんが死んだわけじゃないのは分かっている。でも、いまだに式神降ろしが成功したのはあの一回だけ。

もう一度できるのか分からない。しかももう一度降ろせたとしても、それがナガツキちゃんだとは限らない。もう一度ナガツキちゃんを呼べるのかは分からない。もしも呼べなかったら、もう二度とナガツキちゃんとは会えない……

そんな、困惑と失望と不安と悲嘆を込めて、香々美は

「なんでなのよ、なんでなのよ、なんでなのよ、なんでなのよ、なんでなのよ……」

「お、落ち着け」

左は、香々美の肩をそつと抱いた。

「ナガツキさんは、別に死んだわけじゃないんだろ。金輪際会えないってわけじゃないだろ。大丈夫、大丈夫だ。とにかく落ち着け。」

……… 雑音君、香々美さんを、リビングに連れてって」

「あ、ああ、分かった」

雑音は呆けたまま頷き、部屋を出るように香々美の背中を押した。おぼつかない足取りの香々美と呆然とした表情のままの雑音を送り、

「何でこんなことになったのか……」

左は親指の爪を噛みながら呟いた。そして首を回し、扉の横に立てかけてある黒いレザーの長細いバッグを、じっと睨んだ。

リビングには、重苦しい空気が漂っている。

香々美、雑音そして八代がテーブルに向かって座っているが、各々目を伏せたまま口を開かない。三人とも思い悩むような、悲しみに耐えるような表情。香々美が落ち着きを取り戻してからゆづに一時間以上経っているが、その姿勢のまま誰も動かない。動こうとしないのである。

唯一、雑音は時折顔を上げて香々美や八代の様子を伺うが、それはその動作だけで終わってしまう。他の二人とも、ナガツキに対して普通以上の感情を抱いていた。そのショックは推し量るべくもないだろう。かける言葉が見つからない。雑音はいたたまれなくなりながら、なおも黙っているしかなかった。

と、背後からざいという音が聞こえてきた。

振り返ると、左がナガツキの部屋から出てきたところだった。嘆息しながらこっちに向かって廊下を進んでくる。

左は雑音の視線に気付くと、困ったような顔をして、

「……さっぱり、分かんないよ」

と肩をすくめた。

「分からないって、何がだ？」

「色々だよ」

左は雑音の横、空いている席に座りながら、

「つまり、何でもこんなことになったのかってこと」

「……犯人ってことか？」

「犯人つてのも含めて、色々」

雑音に自嘲気味な表情を向けつつ、左は鼻を鳴らして答えた。

「ナガツキさんが人形に戻っていたことから考えても、あの妖刀が使われたことは間違いないだろうね。だとしたら誰がやったのか、どうやってやったのか、どうしてやったのか。それらがまったく分



からないんだ」

「……お前、さっきからあっちこっちよろしてて、何をやってるんだと思ってたが、そんなこと調べてたのか？ そんなの、僕たちが調べることじゃ　　というか、そうだ、早く警察に知らせよう」

雑音はがたつと椅子を揺らしつつ立ち上がりながら、ズボンのポケットから携帯を取り出した。

「死体がなかったもんだから考えが到らなかったが、これはれっきとした殺人事件じゃないか。早く警察に　　」

「まあ、待つてよ。雑音君」

左が雑音の袖を引っ張り、引き止める。その行動の意味が分かっているような表情で見下ろしてくる雑音に、左は首をふるふると振りながら、

「これは殺人事件じゃないよ。殺人じゃあない。ナガツキさんは人じゃなくて、精霊だよ。しかも、死んでもいないんだ。警察なんか呼んで、その辺をどう説明するつもりなんだい？」

「それは……」

雑音は考え込む。

警察を呼んで、首が切られた人形を差し出して「この人が殺されたんです」と言っ、果たして信用してもらえだろうか？ 最低限、精霊を降ろして見せなければならぬ。さらに、それが手品でもなんでもないと証明しなければならぬ。妖刀についても説明しなければならぬかもしれない。それができなかったら　　ただの悪戯とみなされるだけだ。ハードルが高い。

結局、雑音も雑音の中で「警察を呼んでも問題がややこしくなるだけで、解決は遠のく」という結論に達し、

「……じゃあ、どうするんだ？　このままほっとくわけにもいかないだろ？　ナガツキさんは斬られたんだ。斬った人間がいるんだ。

この近くに。それは間違いない。このままじゃあ、僕たちまで　　」  
「だから、俺が色々調べてるんじゃないか」

左は掌を上に向けるジェスチャー。

雑音は、その仕草をふっと息を吐きながら眺めた。そして椅子に座り直し、

「……で、調べてみて、何か発見があったのか？」

「いくつかはね。さっきも言った通り、ナガツキさんを斬ったものはあの妖刀だろうけど、それはバッグに入ってナガツキさんの部屋に立てかけられたままだった。つまり、あの部屋に入れば、誰でもその凶器を手にすることはできたんだ」

「……凶器からは犯人を特定できないと？」

「そ。血なんかついてるわけないしね。返り血で犯人を捜すなんてこともできない。……で、次に考えるのが、一体誰があの部屋に入れたのかってことだ。窓も閉め切ってたし、廊下の扉は無傷。鍵穴にも他のところにも傷一つなかったよ。そして扉には普通の鍵穴があるわけだけど、その鍵は」

「そうだ！ 鍵は開いてた！」

雑音は、左が言い終わる前に叫んだ。

「朝、最初にあの部屋に入ったのが僕だって言うなら、部屋は確かに開いてたぞ。ってことは、犯人は鍵を事前に入手してたってことなのか？ それとも合鍵を持ってたとか？ その辺を調べてみれば、犯人も」

「そういうことじゃないの」

雑音の話に割り込んできたのは、さっきからうつむいてテーブルの表面を見つめ続けたままの香々美だった。呆然とした表情、いくらか震えている声で、

「ナガツキちゃんは、昨夜鍵をかけないまま寝たのよ。私は閉めるように言っただけけど、『一秒でも早く主の危機に駆けつけることができるように』って。……だから、鍵がかかってなかったのは元々。そのせいで、そのせいで……」

歯を食いしばり、まつげに涙を溜める香々美。その表情を見て、雑音は何も言えなくなってしまうた。

左が、黙り込んだ雑音の方を向き直り、  
「……とまあ、そういうわけで、残念ながらこれも犯人を断定する材料にはならない」

肩を持ち上げる仕草をしながら言う。

雑音は落ち着いた口調を取り戻しつつ、

「……でも、この中の誰かが犯人なのは間違いないだろ？」

「いや、それも分からなくなってるんだ」

「それも？」

「そう。実は朝、そのこのロッジの正面玄関の鍵も開いてたんだ」

「何だつて？」

言いながら、眉を吊り上げる雑音。

左は肩をすくめながら、

「今朝、最初に起きたのが僕でね。外に置きっぱなしの幽霊探知機はどんなもんかと見に行こうとしたら、鍵がかかってなかった」

「……それは、かけ忘れたのか？ それとも犯人が開けたのか？」

ええと、昨日最後にあそこを閉めたのは――

「私」

またしても、香々美が答えた。顔を上げようとせず、呟くように、

「昨日、幽霊探知機を試運転させた後、最後にロッジに入ったのは私。それは覚えてる。だけど、閉めたかどうかは、正直覚えてないの」

「……まあ、そりやそうだね。家を出て五分後に『あれ？ 家の鍵締めたっけ？』って不安になる人なんていくらでもいる。鍵を閉めたか閉めなかったかをいつもきっちり覚えてる人なんてそうはいない。現実はその都合がいいもんじゃないよ」

左が嘆息しながら言う。

「つまり、これでこの犯行はすべからず誰にでもできることになっちゃったんだ。そう、この付近にいる人なら誰でも。僕たち以外の

誰にでも」

「……でも、僕たち以外に犯人がいるなんて、考えられないか？ この周辺には民家もないんだ」

「潜んでたのかもしれないよ」

「それにしたって、こんなことする理由が分からないだろ。強盗とでも言うのか？」

「いや、金品は何も盗まれてなかった。……まあ、犯行の動機なんてそれこそ犯人のみぞ知るファクターだ。ただの殺人狂で、ナガツキさんが斬られたのはたまたまかもしれない」

「……つまり、キャンプ地でモンスターに襲われるホラー映画みたいなもんだっていいのか、この状況が？」

苦笑いする雑音。

自分で言っていて馬鹿馬鹿しくなる。あんなもの　あんな殺人鬼なんていう　設定　には、リアリティの欠片も感じない。あんなものが存在するなんて考えられない。確かに雑音自身もその手の映画を観て楽しむこともあるが、それでもフィクションだという線引きは自分の中にちゃんとある。無差別で出会った人を殺す人間なんて馬鹿馬鹿しい。まだ、殺し屋をターゲットに据えている『藁人形』の方が、信憑性がある。

その表情から、雑音が殺人狂という意見を鼻で笑っているのを見て取った左は、

「……じゃあ、逆に聞くけど、僕たち四人のうちでナガツキさんを殺す動機を持つている人なんているのかい？」

「……え」

聞かれて、雑音は言葉に詰まる。

ナガツキに対して刃を向ける人間。斬りかかる人間。殺そうとする人間。幽霊研究会のメンバーで、ナガツキに対して悪印象を持っている人など思い浮かばない。そもそも、ナガツキは週末の幽霊研究会の活動に時折参加する程度で、そこまで会のメンバーと深い親交があったわけではなかったのだ。そんな彼女を殺すなんて、そん

なことをする人は確かに

「……いや」

急に、座った姿勢のまま膝の上で拳を握り、香々美の横で固まっていた八代が呟いた。

「一人、一人いるんじゃない……それは……あ、いや……」

そこまで言つて、八代は言葉を濁す。ちらちらと雑音と香々美の方を見やり、さながらこの二人をおもんぱかるような仕草。八代は最後まで言葉を続けなかったが、しかし左と雑音にも、八代が何と言おうとしたのか察しはついていた。つまり、八代はこう言つつもりだったのだろう。

雑音なら、動機がある。

この中でナガツキを邪険する立場にいる人間は、雑音しかない。香々美に思いを寄せている雑音にとっては、彼女を守るナガツキの存在が邪魔だったはずだ。

八代も左もそして当人である雑音も、そこを理解した。理解し、そして考え込むように黙り込んだ。唯一理解していない香々美だけは、きよとんとした目で急に黙り込んだ八代を眺めている。

変な空気が流れてしまった空間を取り繕うように、左は三人を見回して、

「……まあ、犯人は断定できないわけだから、とにかく今は今後の身の振り方を考えよう」

## 第五章「第二の事件？」

合宿の二日目は、静かに 寂しいほど静かに 過ぎ去った。香々美と八代は午後になってもテーブルの木目を見つめるばかりで、雑音もそれにならって地蔵と化していた。時々お茶を汲んでみるが、湯飲みは冷め切ってからようやく空になるような状況。給仕係に徹してみても、やり甲斐はまったくなかった。

そして左はというと、色々調べているのだろう、各部屋に入りたり出たり あちらこちらを歩き回っている。

夕方、五時を回った頃にようやく顔を上げた香々美が、

「……もう、帰ろう」

と呟くように言ってきた。しかし最寄のバス停のバス発着時刻は過ぎていること、またタクシーなどで帰るにしても日中にはたどり着けず駅で足止めをくらうことは自明だったので、この案は棄却。昨夜帰ってしまった長居にも電話で事件について報告をし、そのついでに車で送ってもらえないかと尋ねてみたが、これも不可能。長居は別用で、麓の町よりもさらに遠くへと出掛けてしまった後だということであつた。明日の午後にならないとロッジには戻れないと伝えられた。

かくして四人は、もう一日ここに留まらなければならないという結論に達したのである。

そして迎えた、合宿三日目。

三日目は、雨だった。

大粒の雫が、早朝からしんと降り注いでいる。ただでさえ周囲を高い木々で覆われている立地条件。日光が差さないととなると、いよいよもって辺りは真っ暗になった。日はすでに昇っている時間であるにも関わらず、電気をつけなければ部屋の中が何も見えない

ような照度。まるで夜のような状態だった。

しかしそんな重苦しい雰囲気とは裏腹に、その日の朝は何事もなかった。つまり、四人とも　ナガツキ以外の四人とも　朝リビングに顔を出したのである。その様を見て、安堵の雰囲気がリビングに流れたのは四人全員が感じていた。

だが、全員がテーブルに集まっただけはいいが会話など弾むこともなく、皆黙々と香々美が作った朝食を食べるのみ。時々雑音と左が世間話を混ぜるが、話が盛り上がることもない。笑顔など微塵も見られない食卓が繰り広げられた。

そしてその後は、相変わらず昨日と同じ状況。

雨粒が窓を叩く音を聞きながら、リビングで香々美と八代と雑音が、時計が三時　つ、まり昨日、長居が迎えに来ると伝えてきた時間　を指すのを、ただじつと待つだけであった。

唯一違うのは、昨日は辺りをちょこまかと動き回っていた左が、今日は部屋にこもっていること。昨日一日調べまわって、へとへとに疲れているということだった。朝食を食べ終わって以降、部屋からまったく出てこない。

昼過ぎになっても出てこないため、結局雑音が昼食が乗った盆を手の平にのせて、左の部屋に運ぶことになった。

雑音は、左の部屋の手前、木製の扉をノックしながら、

「おい、左。昼飯だぞ」

と叫んだ。が、返事はない。

雑音は問答無用でノブに手をかけ、部屋をがちゃりと開けた。ドアが動き、開けてくる部屋の中の景色。その視界や効果音のせいで、一瞬昨日の出来事が雑音の脳裏にフラッシュバックする。

ぶんぶん、雑音はそれを振り払うように頭を振った。

そんなわけない、これ以上あんなことが起こるはずがない、と自分に言い聞かせるように呟く。思い込ませるように呟く。そして大きく息を吐き、雑音は再度、部屋の中に足を踏み入れた。

床の上には、人形はない。

ベッドの上には、ちゃんと人型が横になっている。

すうすうと、寝息も聞こえている。

人知れず安堵の嘆息をしながら、雑音はベッド脇の机に盆を置いた。そして部屋の奥、布団がかぶさった背中を揺らしつつ、

「おい、左。起きろ」

「……………」

「ほら、香々美がサンドイッチと紅茶を用意してくれたんだ。紅茶が冷める前に早く食べろって」

「……………」

「……おい、起きてんだろ」

言いながら、雑音は左の背中をペチンと叩いた。

「ぐえっ」

「ほれ、起きてるんだろ。早く食べろって」

「……………」返事がない。ただの屍のようだ」

それだけ言って、また動かなくなる左。

雑音ははあとため息をつき、左の首元の真上で紅茶のカップを傾けた。一滴ぼとりと落ちる雫。水滴が首筋に到達したところで、雑音はぼそりと、

「ニフラム《亡者消滅》」

「あちちちっ」

左はがばつと起き上がり、首の後ろをさする。

「ちよつと！ 死者に対して何てことするんだ！ 勇ましく戦って死んでいった者に対する敬意がない！」

「じゃあ、火葬の方がよかったか？」  
メラゾーマ

「火葬と書いてメラゾーマと読まないでよ！ 怖いよ！ 何をするつもりなの！ ザオリクって選択肢はなかったの！」

「ないよ。僕は魔法使いなんだ」

「ニフラム使ったのにつ！」

「……………」

雑音は左のツツコミをさらりと流し、カップを盆の上に戻しながら



ら、

「ほれ、さつさと食べる」

「うゝん、分かったよ」

左は伸びをしながらベッドから立ち上がり、皿の上のサンドイッチへと手を伸ばした。そのまま口に入れ、しゃくしゃくと食べ始める。しかしその顔には、まだ眠そうな、疲れたような表情が浮かんだまま。

雑音は、その緩慢な動作をまじまじと眺めながら、

「……何だ、お前、そんな疲れるまで昨日何を調べてたんだ？」

「あっちこっち。まあ、みんなの荷物とか……」

「荷物だと？」

雑音は、思い切り顔を渋くする。

「おい、お前、僕の荷物まで勝手に調べたのか？　というか、香々美やらナガツキさんやらの荷物まで調べたってのか？　そりゃあ犯罪だろ」

「大丈夫だよ。俺はアブノーマルだから」

「いや、ノーマルだからこそ問題が……って、アブノーマル？　アブノーマルって言ったか、今！」

「まあ、冗談は置いておくとして」

右手でサンドイッチを口に運びつつ、まあまあと左手を振りながら、

「調べたけど、結局誰の荷物からも刃物の類は出てこなかったよ。やっぱりあの妖刀が使われたのは、逆立ちしても間違いないだろうね」

「……そりゃそうだろう。ナガツキさんが断ち切られてたんだから」

雑音は、左の向かい側、机の備え付けの椅子に座りながら答えた。「そんなの、昨日の時点ですでに分かったことだろう。それ以外にないのか、新しく分かったことってのは？」

「……そうだね、あとは、犯人は手練なのかも知れないよ」

「手練？　どういうことだ？」

「つまり、刃物の扱いにかなり慣れてるってこと。ナガツキさん  
　　というか、ナガツキさんが憑いてた人形の首は、きれいに  
スパツと切られてたんだ。包丁で大根をぶった切るように、ね。果  
たして素人が真剣を振り回して、ここまできれいに　狙い通りと  
言わんばかりに　切れるもんだろっかね？　俺は結構引つかかる  
んだけど」

言いながら、手の平を上に向ける左。

雑音はそれに向かい合いつたまま、「ふむ」と息を吐いた。

そう言えば確かに、昨日見た人形の切られた首の切り口は、まる  
で元々そう成形してあるかのように平らだった。それに加えて、ナ  
ガツキの部屋には争った形跡もなかったし、昨夜は何の音も聞こえ  
なかった。ナガツキに声を上げる間も与えずに危害を加えることが、  
素人にできるとも思えない。ナガツキが香々美の身を案じて警戒し  
ていたというなら、彼女に気付かれずにドアを開け、刀を取り出す  
のは相当困難だろう。玄人が　　ない話でもないかもしれない。

雑音は納得したように腕を組み、

「……じゃあ、刀を使い慣れてる犯人ってのは、一体誰になるんだ  
？　僕たちの中に剣術の嗜みがあるようなやつがいるっていうのか  
？」

「さあ？　もしくは、そういう部外者がこの付近に潜んでるのかも  
しれないね」

左は、肩をすくめながら言う。

「……あともう一つ、昨日調べててびつくりしたことがあるんだ  
けど、実はあの妖刀、刃がねえ」

と言葉を続けながらサンドイッチを食べ終えた左が、紅茶に手を  
伸ばしかけたとき、

「あーーーーー！」

悲鳴　　というよりも、驚いたような呆れたような叫び声　　が、  
遠くから聞こえてきた。これは　　八代の声。やたら遠くから  
響いている。

雑音と左は反射的に立ち上がり、駆け出した。

部屋を出て廊下を進むと、目の前、玄関が開いている。依然降り続く雨で濡れている扉の奥から、口を大きく開けた八代が縫い出して来た。

「た、大変ですよ、十二街君！」

驚愕の表情で、二人の方へ駆け寄ってくる八代。そして後方を指差しながら、

「ほら、あの、『幽霊探知機』が」

「探知機？」

左は濡れるのも省みず、外へ飛び出た。そして扉の脇においてあるはずの、左の私財である幽霊探知機を見下ろす。

ロジの軒下、コンクリート土台の上に置かれているテレビくらいの大きさのアルミ製の筐体。その上面と側面が

ベコベコに潰されていた。

「あー！ ちょ、これ、壊されてる！」

慌てて幽霊探知機に駆け寄る左。

「ちよつと、これ、ああ、もう、ひどい。こんなになるまで。くそ！ 一体誰が……」

上、横、前、後ろから探知機を覗き、その状態を確かめる。あちこちに金属棒で叩かれたような痕が残っていた。その衝撃は内部にまで到達しているようで、形は歪に変形している。電源を入れてみても、まったく反応しない。

「な、なんだよ、これ、高かったのに、一体何でこんなことを……」

左に続いて雨の中外に駆け出してきた雑音は、もはやアルミの塊と化した筐体を抱きかかえ悲嘆にくれる左を、ただ眺めるしかなかった。雨に濡れながら、ただそこに立ち尽くすのみ。

ふいに、

「……一体、何が起こってるの？ こんなことするのは、誰なの？  
まだ……何かあるっていうの？」

と、脇から消え入りそうな声が聞こえてきた。振り向くと、玄関  
口から顔を覗かせてきた香々美。恨めしそうに、左の丸まった背中  
を見下ろしている。その虚ろな表情に、雑音はなおも黙るしかなか  
った。

黙ったまま、雨に濡れる森の奥を眺める。

雨音に混じって、遠くからカラスのあざ笑うような鳴き声が  
聞こえてきた。

## 第六章「第三の事件」

### その一

時刻は二時半を回っている。

四人は、各々の荷物をまとめて玄関の前に待機していた。四人ともが、長居が到着すれば即刻出られる準備がすでに済んでいるのである。特に左は、来る時に一番の大荷物だったものがすでにスクラップになっていたので、やたら簡潔に支度が済んでいた。

玄関近くの壁際、自分のスーツケースに腰掛けた香々美は、考え込むように顔を斜め下に向けている。しかしその実、これから来る長居のことも、帰路の道中のことも、家のこともすべて意識の外だった。彼女が今考えているのは、ただ一つ

ナガツキをもう一度降ろせるのかどうか。

自信は無い。しかしやってみるしかない。成功するまで何回でも、何十回でも、何百回でも、何千回でもやる。やってやる。いつも柔らかに微笑みかけてくれた彼女を取り戻すためなら、いくらでもやってやる。香々美は一人、静かに固い決意をしていた。

彼女の傍らで腕時計を睨んでいた八代は、ふと視線を移し、香々美の周囲を眺めながら、

「……あれ、東さん？ ナガツキさんの荷物は、どうするんです？」

「それは、その………持ちきれないし、ひとまずここに置いておこうと思っています。ひと段落ついてから、また、取りに来よう」と……

香々美は視線を上げることなくそう答えた。ひと段落　そ

う、もう一度ナガツキを降ろすことに成功したら、もう一度来よう。もう一度、二人で来よう。そんな風に逡巡し、香々美は決意をさらに硬くする。

八代はその返答に口をへ字にして、

「まあ、それもそうですが………ただ、あの刀だけは持ち帰った方がいいんじゃないですか？ その………色々問題でしょうし」

「……そうですね」

香々美は納得したように肩を落とした。

「まあ、向こうに着くまでは僕が運びますよ。取ってきます」

そう言つて、八代はリビングを抜け、廊下へと進んでいった。そしてナガツキの部屋の扉を開き、中に歩を進めた、その瞬間だった

突然、周囲が暗転した。

「え？ 何！」

「うわっ、何だ？」

「どうした？」

香々美、そしてドアの手前で立ち話をしていた左と雑音が声を上げる。

香々美は視界に誰も確認できず、音声だけを周囲に投げかけるように、

「ちよつと、これ、停電？」

「……みたいだね。昼間だったのに真っ暗だ。ブレーカー落ちたのかな？ ええと、確かブレーカーって外の、玄関の横に」

そう言つて、左が玄関の方向へと足を踏み出した時、奥から、

がちゃあん

ガラスが割れるような音と、

どすんっ

重いものが落ちる音が聞こえてきた。それに反応し、

「な、何？ 何の音？」

香々美が怯えるような声。

左は急いで扉を開け、外に出た。そして雨が降りしきる中、戸の横の壁に金属のボックスを発見し、開く。中から出てきた黒いレバーを上に向けた。

すると、部屋の明かりが数回瞬き、白い光を放ち始めた。

甦る視界。しかし左は落ち着くことなく、呆けたままの香々美と雑音の横を通り抜けて、奥へと駆けていく。

半開きの扉を横に蹴り開け、

「八代先輩！ 何かあったんですか？」

そう叫びながら中に入って行った

声は聞こえてこない。

しかしそれ以降、左の

それを不審に思った香々美が部屋の方へ近づいていき、中に入ろうとしたその時、いきなり左が出てきた。そして香々美の顔を覆い隠すように抱きかかえながら、

「……入らないで」

言い聞かせるように言う。

香々美はわけも分からず、押されるがままに部屋から離れるしかなかった。

その様子をいぶかしんだ表情で見ていた雑音は、

「どうしたんだ？」

と、左の横を通って、ナガツキの部屋の中をのぞいた。

二日目の朝に、首を切られた人形を発見した場所。今日そこにあったのは

首を切られた、本物の死体だった。

それから三十分後。香々美は、椅子に座ったまま動かなくなっていた。

さつきまで床にへたり込んでいたのを、左と雑音が椅子に座らせたのだが、それでも様子は変わらない。相変わらず、指の先すら動かさないのである。三十秒に一回程度まばたきすることから、かろうじて生きているのが分かるというくらいだった。

その真正面に座っている雑音は、その様を眺めながら嘆息する。一体どうしたもんだろうか、この場合はどうという言葉をかけてやればいいのか。そもそも、効果のある言葉なんて言うものが日本語に存在するのだろうか。色々考えを巡らせるが、その答えはもはや雑音には見当もつかないことだった。

後方ではたと音を鳴った。雑音が首を回すと、左がナガツキの部屋から出てくるところだった。

ハンカチを口に当てたまま悲痛な表情で廊下を進み、左は香々美の横の席に腰掛ける。そして吐き出すように、はあと大きく息を吐いた。

その向かい側にいる雑音は、腕をテーブルにのせた姿勢のまま、

「……おい、大丈夫か？」

「うん、まあね。……………それより、そっちはどう？ 連絡ついた？」

「ああ。警察はあと一時間くらいで来るそうだ。まあ、場所が場所だけに、それくらいかかって無理ないだろう。長居さんは、雨のせいで少し遅れて、四時頃に着くそうだ」

「そう。まあ、そんなもんだろうね」

左はハンカチをズボンのポケットにしまいながら答える。そして首を横に向け、

「……香々美さん、大丈夫？」



名前を呼ばれて目元をぴくつと動かした香々美は、瞳にいくらの光を取り戻しながら、

「うん、なんとか……」

「……そう。まあ、気は確かなようでよかった。失神しちゃうんじゃないかと思つてさ」

「……………うん、まあ」

前にも似たようなことがあつたから　と、声には出さずに呟く。近しい人の突然の死　しかも他殺　を知らされるのは、香々美にとつて十年ぶり、二度目。耐性なんてできるはずもないが、何とか意識だけは手放さなかつた。

「しかし、本物の人死になつちやつたね」

頭を前に垂らしながら、左はうめくように言った。

「しかも、それが会長だとは」

「……何だ、意外なのか？」

「意外と言つたら、人が死んだ時点で意外だし、心外だけどね。ただ　本当のことを言うと、ナガツキさんの件に関して、俺は会長のことを数パーセント疑つてたんだよね」

言いながら、左は嘲笑気味な表情を作る。

その『ナガツキ』という単語に反応するように、香々美がぱつと顔を上げて、

「……………どういうこと？」

「つまり、ストレートに言つちゃえば、ナガツキさんを斬つたのは八代会長だつたんじゃないか、と思つてたのさ」

苦笑しながら、左が言う。

「考えてもみなよ。俺たち三人には、彼女を殺す意味なんてないでしょ？　いや、動機の問題じゃない。それはあくまで犯人

のみぞ知るファクターだよ。今俺が言つてるのは現象的な部分。つまり、たとえ彼女を斬つたとしても、彼女は消えない。人形と断ち切られても、死ぬわけじゃない。香々美さんが精霊降ろしに成功すれば、また復活する。彼女は斬つても死なない

彼女を斬っても、意味はないんだ」

「あ……………」

香々美が呟くように息を漏らした。

「そう、意味はないし、しかも危険なんだよ。ナガツキさんが戻ってきた時、本人から直々に告発されかねないからね。殺人は、口をきかなくなるからこそのもの。しかし彼女は斬った後も口をきく。それを知ってる俺たちには意味のないことなんだ。そして

思い出してごらんよ、初日の夜、ナガツキさんからその話をされた時のこと。その時、会長はいなかっただろ？ 確か、風呂に入ってただろ？ そう、会長は知らなかったんだ、そのことを。ナガツキさんが斬られても死なないことを。だからナガツキさんを斬ることは、会長にとつては意味のあること。ナガツキさんを斬るという行動を起こしえるのは、会長だけだろ」

ここで言葉を区切り、表情に笑みを含めて、

「……まあ、これは『犯人が俺たちの中にいる』という前提で物を考えた時の話だ。知り合いを疑うなんてしたくないし、第一外部犯の可能性もある。それに本人が殺された以上、外部犯の可能性の方が大きいだろう。だから、これはただのたわ言だよ」

「そう、そうね……………」

香々美はかろうじて聞こえる程度の声量でそう言い、再び下を向いた。

再び無音になるリビング。しかしその沈黙を許さないように、

「……で、左。今度は何を調べてたんだ？」

今度は、雑音が声を上げた。テーブルに片肘をついて、胡乱な目つきで左を見ている。

その視線に気付いた左は、

「……………何、雑音君？ その挑戦的な目は？」

「だって、そうだろ？ 死体が置いてある部屋に好き好んで入るな

んて。お前の方が謎解きに挑戦してるみたいじゃないか。どこぞの探偵のごとく、な。だったら、僕がその戦績を聞いてやろうってことだ」

「別に挑戦とかじゃなくて、分かることがあるなら分かるところでただけなんだけどね」

説明しながら、左は肩をすくめる。

「まあ、見れば分かることだけど、ガラスの破片は内側に散らばっていた。そして床の上には足跡はなかったよ。……ただ、窓の近くは吹き込んでくる雨のせいでびちょびちょになってたから、そこに足をついたとしたら見分けはつかないけどね。泥もほとんど落ちてなかったけど、それは靴を脱げば足跡も残さないで済む。相変わらず外部犯の可能性は否定できないよ。……ただ俺が一番引つかかってるのは、部屋どうこうよりも、むしろ切られた首の方なんだけどね」

「……………首？」

「そう。完全に分断されてただろ？ おかしいと思わない？」

当然分かるだろうとでも言いたげな左のイントネーションに、雑音は苛立ちを隠せない声音で、

「おかしいって、何がだよ？ ナガツキさんの時もそうだったじゃないか」

「いや、それはケースが全然違うよ。今回は会長だ。正真正銘の人間なんだよ。……………分からない？ 人間の体には何がある？ 筋肉と、脂肪と、あと」

「骨か」

「そう」

雑音の回答に、左は大きく一つ頷いた。

「そうだよ、人の体には骨があるんだよ。漫画なんかだと割かし簡単にやってるけどさ、骨を刃物で絶つなんて、一体どれだけの力があると思う？ しかもその周りには肉がついてるんだ。……まあ、俺だってカルシウムやら脂肪やらの正確な硬度なんて知らないけど、

だけど直径五十センチの丸太だつてそう簡単には切れないだろ。ノコギリで時間をかけてやるならまだしも、あれは一瞬のことだった。そんなこと人間にできるのか？ できるとしたら、どういう方法を使ったのか？ 正直なところ、俺の考察はそこで行き詰つて」

「できるわよ」

突然、香々美が声を上げた。

今の発言が本当に香々美のものなのか確認するような視線を向けながら、左は聞き返すように、

「……へ？ できるつて？」

「だから、首でも丸太でも何でも、一太刀で切ることができるつて言つてるの、あの妖刀を使えば          そうね、見せるのが早いわね。ちよつと、取ってくる」

そう言つて、立ち上がろうとする香々美。

その動作を見て、慌てたような顔をした雑音が、

「あ、僕が取ってくるよ」

そう言つて香々美を制止し、ナガツキの部屋へ駆けていった。

もちろんこれは、香々美がああ様の惨状を見ないようにする配慮である。あの部屋に入ればあ様の様が目に入るのは必定なのに、今の香々美はそこまで頭が回っていないのか。あの時せつかく左が止めた意味がなくなってしまう。廊下を進みながら、雑音は現在の香々美の混乱具合を確認し、確信した。

部屋を中心をなるとけ目に入れないようにして、壁にかかっている長細いレザーバッグを手に取り、引き返す。そしてリビングでそれを香々美に手渡した。

受け取った香々美は手馴れた操作でジッパーを開け、中から刀を取り出す。続いて、すらつと赤い鞘を引いた。そこからのぞく銀色の刀身。その刃は

ボロボロだった。

「……え？」

雑音が驚いたような声を上げ、その刃を凝視する。しかしその向

かいの左は、元々分かっていったような表情でその刀をまじまじと眺めていた。

「……ちょ、ちょっと、その刃、あっちこっち欠けてるじゃないか。……え？ それで本当に、ナガツキさんを……？」

「まあ、見てて」

答えながら、香々美はおもむろにテーブルの上にあったりんごを手にとった。そしてそれを空中に放り投げる。緩慢な回転で昇り、そして落ちてくるりんご。その擬似球体に向かって、香々美は水平に刀の刃を走らせた。

りんごと刃がぶつかりりんごは横にはねる、と雑音は思った。しかし、スツという風を切るような音だけがして、刃は抵抗なくりんごを横切った。

こてんと床に落ちたりんご。その衝撃で、りんごが真ん中からぱかっとな割れた。その白い表面は、包丁で切られたものと同じように平らだった。

「どう？ わかった？」

「い、いや、逆にわからないよ。何でそんなボロボロの刃でりんごが切れたの？」

「妖刀っていうのは名ばかりじゃないのよ。妖気をまとった刀。だから妖刀なの。この刀は刃で斬るんじゃない。妖気で斬るのよ。だから、刀の　というより、鉄の刃の切れ味　とは無関係なの。斬れるイメージが湧くものならば、ほとんどのものが斬れるわ。それこそ　人でもね」

香々美はこの刀をここに持ってきてしまったことを今さら悔やむように、トーンを落としながら説明を終えた。

雑音はその説明に納得したような　あるいは無理にでも納得に持っていたような難しい顔をして、

「妖気、ねえ。妖刀にそんな性能があったとは……。じゃあ、今回もやっぱりその刀が使われたのか？」

「いや、それはないよ」

雑音と香々美の会話に割って入るように、左がきっぱりと言ってきた。

雑音は目線を左の方に移し、

「……やけにきっぱりと言うな。何か根拠があるのか？」

「ああ、ある。単純なことだよ。だってさ、時間が足りなかったでしょ？」

説明

と言うより、むしろ諭すように左が言ってくる。

「あの時、会長がナガツキさんの部屋に入った瞬間に電気が消えて、そして俺がブレイカーを上げるまでに、だいたい十五秒くらいしかなかった。もしそのナガツキさんが持ってきた刀が使われたって言うなら、犯人はその十五秒の間に窓を破り、刀を取り出し、会長を斬り、さらに刀をバッグの中にしまわなくちゃならない。それに

見てみなよ、その刀。刃からりんごの汁が垂れてる。いくら妖気とやらをまとってても、刀身に付着するものまでは防いでいない。つまり、血はどうしてもつくってことだろ？ 犯人はこの十五秒の間に、さらに刀身の血を拭うことまでしなくちゃならないんだ。しかも暗闇の中でね。いくら剣術の達人でも、刀をバッグから出したり血を拭う動作までが神速だとは思えない。どう考えてもタイムオーバーでしょ」

「しかし、妖刀だぞ、妖刀？ ボールペンみたく大量生産できるものでもないだろ。ここに一本でもある方が意外なんだ。例外なんだ。現実的に考えて、そんな都合よく妖刀が同じ場所に二本もあるなんて」

「あつたんじゃないの」

左は語気を強め、言い切る。

「確率云々じゃなくて、事実としてそういう結論が出るんだ。外部犯が妖刀を持っていて、それで会長を手にかけた。俺たちの荷物にはあれ以外に刃物すらなかったんだから、さらに外部犯の可能性を高めるね。それに、それだけじゃない。もう一つ問題がある。あの暗闇が、これでもかってほどタイミングがよかったことだよ」

「タイミング？」

「そう。会長が部屋に入った途端、まるで狙い済ましたかのようにブレーカーが落ちたんだ。しかしブレーカーは扉の外。その瞬間は四人の姿は全部確認されている。誰も手動であれを下げることはできなかったよ」

「でも、他にも方法が」

「あるかい？ あの時動いていたのは会長だけだ。しかも当人は被害者だし、第一部屋に入るといふ動作以外何もしてなかった。推理小説なんかでは、電気機器のタイマーを仕掛けておいて、ある時間になると電気を過剰使用させて無理矢理ブレーカーを落とすっていう方法もあるにはあるけど」

「だけど、やっぱりそれもありえないよ。なんせ、あの時間に会長がナガツキさんの部屋に入ったのも、そして部屋に入ったこと自体が偶然だったからさ。元から狙えるようなことじゃなかったんだ。誰かが確実にあの時に手動でブレーカーを下ろした。それはこの四人の中の誰でもない。ロッ

ジの中とブレーカーがある場所は完全に遮断されていたから、しかもあれは一瞬の出来事だったから、内側の人間と外側の人間のコンタクトは不可能、つまり無関係。複数犯でタイミングを見計らう人間と実行犯が分かれてたのかも知らないけど、とにかく、この事件は外部犯としか言いようがない」

「……でも、そいつらの目的は何なんだ？ 何で僕たちを狙ったんだ？ そもそも、何で僕たちがここにいることを知ってたんだ？

そいつらには、僕たちを殺して何のメリットがあるっていうんだ？

それに、わざわざブレーカーを落とすなんていう作戦を企てた理由は？」

「……やけにつつかかるね、雑音君」

左は雑音に向かって、嘲るように微笑んだ。

「何度も言ってる通り、犯行の動機なんていうのは犯人のみぞ知るファクターだ。そんなことを考えるのはナンセンスだよ。ただ誰でもいいから殺したかっただけかもしれないじゃないか」

「……そうね、妖刀の妖気に当てられて殺人願望を抑えられなくなる人もいるって話は聞いたことあるし」

香々美が静かに相槌を打つ。

「暗闇を作ったのだって、顔を見られないためだったとか、それともただの思い付きかもしれない。そういうのは」

と、左が言いかけたところで、ロッジの壁の向こうからじゃりじやりという砂を滑らせたような音が聞こえてきた。

「お、警察が来たのかな？ それとも長居さんかな？」

言いながら、左は腰を浮かせた。

そのセリフを聞いたところで、ふいに香々美が険しい顔を作り、  
「………ねえ、思ったんだけど、私たちがここに知っていることを知っていて、さらにロッジの外側にいた人間となると」

「うん、そうだね」

犯人は長居さんって可能性もあるね」

左は鋭い視線を向けて香々美に答えた。

「……まあ、その真偽は警察が調べれば分かると思うよ。この三日間の長居さんのアリバイを調べればね。ここからは俺たちの出る幕じゃないさ。……さあ、とにかく出迎えよう」

そう言って、左は扉の方へ歩を進めていった。それに倣うように雑音も戸口へと進む。

ドアを開けると、入ってきたのは三人の警察だった。慣れた動作で、二人に向かって手帳を示してくる。

そしてその制服をぴしっと着こなした重々しい表情の三人の大人に、左と雑音が説明を始めた。そこそこ手際よく、時折お互いに情報を補い合いながら、事件の状況を伝えていく。

これでもうこの事件は警察の管轄に移ったと、香々美は安堵のような、その割りに納得がいていないような気分にかられた。

ナガツキの部屋へと警官を誘導する左と雑音。その二人の背中を



眺めているうちに、ふつと一つの疑問が香々美の中に生まれた。

「……………あれ？ 『幽霊探知機』を壊したのは、何でだったんだろっ？」

## 終章

三人が解放されたのは、通報した三日後　つまり、合宿に出発してから六日後のことだった。

三日間の間、三人はずっと警察署に留まり、事件に関する様々なことを聞かれた。もちろんナガツキに関することは最初から表面化させるつもりはなく（元々ナガツキが運んできた荷物が模擬刀とバツグ一つのみだったため、それら全部を香々美の持ち物だったと説明することと言い逃れた）、長居を含めて全員申し合わせておいたように、八代に関することだけを知らせたのだった。

結局のところ、長居には完全なアリバイがあり（事件当日の朝にロッジから四十キロ離れた場所で知人と会っており、その人が証言者になってくれた）、彼女は容疑者から外れた。

妖刀に関することも伏せておいたので、切断方法についても警察は悩むこととなったが、それ以外の情報　つまり停電時の状況から、やはり外部犯という線で捜査を開始したらしい。

かようにして雑音も左も香々美も容疑者から外れたため、三日後に晴れて自由の身となったのである。もちろん事件が解決するまでは逐次何かしらの協力要請はあるだろうが、生活は日常に戻る。警察から連絡して迎えに来てもらった両親と共に、香々美と左は車で家へと帰っていった。

唯一家族との連絡がなかった雑音は、途中まで左の父親の車に乗せてもらって最寄り駅のターミナルで降りてもらい、そこから徒歩で帰るという方法を選択した。

そして雑音は、自宅に向かって駅前の大通りを歩いている。

ドラムバッグを肩から提げ、すたすたと車道脇の歩道を進んでいく。買い物帰りの主婦や自転車に乗った子供などがすれ違っていく。

が、気にする様子もなく無表情でそれらをかわしていく。そしてコンビニを通り過ぎたところで、雑音はくるっと方向転換し、ビルとビルの隙間の路地裏へと入っていった。

日も差さない裏道。賑やかな大通りとは逆に、ずいぶん閑散とした道だった。喧騒も遠くからしか聞こえてこない。この道を歩く人間は、雑音以外に誰もいないのである。

路地裏に入ってから十メートルくらい歩いたところで、上空からばさばさという風を叩く音が聞こえてきた。

その音は次第に大きくなっていき、音が大きくなるに連れて歩を進める雑音の横にできている影も段々と大きくなってきた。大きくなり、大きくなり、そしてついに雑音の顔の横に現れた影

それは、大きなカラスだった。

都会で見かける割かし大きなカラスの、さらに一・五倍くらいの大きさ。羽ばたきをやめ、ずさつと雑音の肩に止まった。そしてその暗黒色のくちばしを開け

「はーあ、まったく、疲れたぜ」

と、愚痴をこぼすようにしゃがれた声で日本語を話した。

そのカラスに向かって、雑音は目線と軽い笑みだけを向けて、

「お疲れさん、ストロウ」

「疲れたなんてもんじゃねえよ、小僧。まったく、式神使いが荒いんじゃないか？ ロッジからここまで何キロあると思ってるんだ？ 二十キロ以上あるんだぞ？ しがないカラスにこんな距離飛ばさせやがって」

「カラスって、そりやその傀儡のことだろ。お前は風の精霊じゃないのか」

「そりやそうだけどなあ」

そう言いながら、まるで人間のように　鳥とは思えないような動作で　ストロウは深いため息をついた。

その仕草にくすりと笑った雑音は、

「……で、脇差はどうした？」

「ちゃんと持ってきてやったよ、ほれ」

そう言いながら、ストロウは右の翼をばさつと開いた。翼と右わき腹の間から落ちる木製の棒。雑音は、それを右手ですとんと受け取った。

その茶褐色の棒を顔の前まで持ち上げ、左右に開く雑音。すらんという音と共に、間から銀色に輝く刃がのぞいた。その刃の一部に、赤い染みがついている。

「……あーあ、血が固まっちゃってるな。あの時、拭う暇はなかったもんな。十五秒足らずじゃ、部屋に入って、これを受け取って、斬って、またこれをお前に渡して、そして元の位置に返るだけで精一杯だ。しかも足音を立てないように気を配んなくちゃならなかったし。本当、難儀だった」

雑音は苦笑いしながら言った。そして再び鞘を閉じ、横腹のベルトに挿す。

ストロウはその動作を脇目で見ながら、

「だが、他のやつらにやあバレなかったんだろ？　なら、お前にしては上出来だったんじゃないか。あくまで小僧にしてはってレベルだがな」

「親父と比べないでよ。あいつに敵おうが敵うまいが、比べられるだけで不愉快だ」

「お前、本当に親父が嫌いなんだな」

口を尖らせる雑音に、ストロウはからからと笑った。

「しかし、あいつの腕前は一級品だった。お前も見たことあるだろ」  
「あるけど、見に行ったのはイヤイヤだったんだ。後学のためだとか言って、無理矢理現場に連れてかれたんだから。僕は継ぐつもりなんてなかったのに」

苦虫を噛み潰した顔の雑音。

ストロウはその表情を笑い飛ばすように、

「だが、結局お前もその仕事に手を染めちまったじゃねえか。ぶちぶち言ってたくせに、いきなりだもんな。驚いたぜ、お前が脇差を取ってくるように言ってきた時は。あんな突然殺りなくなるなんて、あのターゲットはどんな殺人狂だったんだ？」

「さあ？　うちの研究会の会長だけど、詳しい人となりは知らない」  
雑音はあくまで歩みを止めないまま、首を横に振った。

「だが、お前が周囲に不審人物がいないことは確認してくれたし、精霊の憑依について知らなかったのはあの人だけだから、犯人は会長で間違いないだろうね。僕が刃を向けた時に感じたあの人の殺気は、混じりっ気なく本物の殺し屋のそれだったよ。ナガツキさんをやった手口から見ても、明らかに経験豊かな玄人だったし。だったら、『藁人形』のターゲットに据えても問題はないだろ」

「……その顔から察するに、色々と私怨が入り混じってるようだが、あんまり仕事に私情を巻き込むもんじゃないぜ。あの親父と同じ道を歩む羽目になるぞ」

「分かってるよ」

雑音はぶっきらぼうに答える。

その口を突き出した雑音の表情に、ストロウはなおも疑う目つきで、

「……本当に分かってるのか？　あんな少数人数しかない場所で仕事しやがって。傍から見てて肝を冷やしたぜ。あんな状況で、よく他のやつを言いくるめられたな。まあ、あのわざわざ停電させたりなんたり面倒くさいことしたのも、そのためなんだろう？」

「そうだよ。見計らったようなタイミングでブレーカーを落とし、窓ガラスを外から破り、刃物を渡してもらい、さらにそれを遠くへ運んでもらう。この一連のことをお前にやってもらったおかげで、『僕には犯行が不可能』と思わせることに成功したってわけさ」

「……ったく、本当にややこしかったぜ。しかも時間もほとんどな

かったし……」

「正直、あの中の一人　十二街左っていう、茶髪の奴　が『妖刀が二本存在する』ってところに考え到った時は、驚いたと言うか、感心したもんだが」

「……どうせ、そこまでがお前の計算の上のことだったんだろ？」

もし自力で思いつかなければ、何気なく誘導してたんじゃないのか」

「まあね。あんまりにもすんなり気付いたもんだから、逆に僕が反論してやったりしたんだけど」

雑音は首をやや傾け、何ともなさそうに答えた。

「でも、あいつには少し悪いことしたとは思ってるよ。あいつの幽霊探知機、壊しちゃったからね」

「……ああ、夜中にお前が雨の中でぶっ叩いてたやつか」

「そう。でもしょうがないさ。お前の鳴き声やら羽音を録音されるわけにもいかなかったし。あれ、電源入ったままだったんだよ」

悪びれる様子もなく雑音は言う。

そんな雑音に対し、ストロウはあくまで不信の視線を浴びせながら、

「壊したことで、逆に他のやつに手がかりを与えるようなことになったんじゃないのか？」

「……手がかりね。その可能性もゼロじゃないけど　正直、

手がかりと言うなら、もつと重要な情報は他の二人も持ってたんだよ。つまり、『式神と式神使いは離れていても意思疎通ができる』

ってこと」

「……おい、それを知られてたのにやったのか？　そりゃちよつと危険だろう」

「まあ、大丈夫だ。確かに僕が式神使いなら、たとえ離れていても、ぶつつけ本番でも、ああいうベストなタイミングでコトを起こせる。あの二人がそこまで考え至る可能性もないこともない。……だけど、警察にいたっては式神や妖刀に関する知識を持ってないし、他の二人にしても『小林雑音にも式神がいる』というアイディアが浮かば

なければ、そこまで考え付かない。疑えない。謎を謎とも思えない。そう、いつも言ってるだろ

謎に存在意義なんてないのさ」

そう言い切り、雑音はさらに前へと進んでいく。

ストロウを肩に乗せたまま、脇目も振らずに路地裏のさらに奥へと歩いていく。

その後ろ姿が闇に溶け込むまで、立ち止まらない。

こうして、『殺し屋殺しの藁人形』 二代目 小林雑音の初

仕事は、幕を閉じた。

## 終章（後書き）

### 後書き

というわけで、『殺し屋殺しの藁人形』でした。

本作は式織の初三人称視点中編ということで、試行錯誤の連続だったわけですが、一応形にはなったのではないかと思います。初三人称と言っても過言ではないような状況で、そのテンポと云うか、リズムのようなものを掴むまでに時間がかかりました。もしかしたら、まだ掴みきれてないのかもしれませんが。

あと、この作品のジャンルというのが式織自身でも掴めてませんで、現在進行形で迷っております。道具が道具なので、とりあえずファンタジー（ローファンタジーのエブリデイマジック？）と銘打ってはおりますが。

加えて、一応第六章の終わりのところが推理小説で言うところの「読者への挑戦」のようなタイミングの場所です。その前に答えがばれてしまうのか、少し不安だったりします。あと、名前遊びのところとかどれくらいの方に気付いてもらえるのかとか……。

とにかく、本作の経験を肥やしにして今後も三人称視点のものに挑戦していけたらと思っております。ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2811d/>

---

殺し屋殺しの藁人形

2010年10月8日15時00分発行